特18
245

# エリサベツ小傳

全

特18
245
特13
535
No13119

帝國圖書館藏

# サベツ小傳

全

耶蘇降世一千八百八十三年
米國聖教書類會社

明治十六年
日本横濱印行

明治二年
ンマルメア国和

# 第一章

## 牛乳屋ウオルプリヂ某の女子エリザベツの小傳

神は眞實の子等は身にあらはるゝ神は恩惠の働を尋ね明むる事に誠に樂さ榮ありけり殊に去なべく貧き人の心に神の恩の光り輝きて神の靈の印したるキリストは像に明証をあらはすを見る故眞に悅びとし事あるべき富貴の人は屢種々に妨礙により ゞごときことある者あれども貧賤の人は斯る障碍なしキリスト信徒の本色を保つことも容易なり去られども富る、人貴き人は神の國にいるに種々の妨碍ありとそ然なゞら富貴は人をして能く其驕傲我慢をすて世の毀譽にひかさをて心貧しく柔和謙遜にして義を慕ふ者往々あるは如何に幸なることならずや是皆神の御恩にして甚ありがたき事なりけり

然はあれども教の本色を見んには身の貧しくして信仰の富る者なる貧賤の人れ中に就て視るべきあり貧人の草れ盧ハ屢神れ宮殿とゐれるおとあり嗚呼あんりゲたき事ゐるゐ誠ゐ世には貧人れ草舎ゐ就て信仰と希望れ貴き教を受ゲ神の智慧と權能と恩惠の働を認る者多し偖此小傳ゐしるそ事は皆實事ゐし て決して造事にはあらず余ゲ此女子を知るに至しそ左の書翰を受てよりゐり即ち是はエリザベッゲ始て余におくりし者ゐり其文ゐ曰く

拝啓未だ一度も謦欵ゐ接してとわらず突然と申しあぐるハ憚りゐさにあらねども怒して聽たまへ婢嘗て一度某の處ゐて御説教を聽聞いたし候間下ハ神ゐ忠義ゐる説教者ゐまして罪人をすゝめて神の罰をのゲれさせたまふ甚も貴き



方と信じ候なり凡て罪の中ゐ居り悔改めずして死もれハ皆神の怒にゐはねゐらず如何におろろしき事ゐらずや請ふ主の力をたのみて働きたまへ願くは神君を惠て君の愛の働に效驗ゐらゐめ多の人をして救拯をゐうむらしめたまへ主キリストハ其召て遣したまふ人とゝもにいまして世の終まで之をゐれずと宣ひしゐゐらずや請ふはげゐたまへ婢はかの義勇兵の一人ゲ間下れ愛を蒙りたるを見て大ゐ喜び候是必ずキリストの愛れ間下を彼人に遣したまひしゐり願くハゥの愛心恒に君の中におりて離ざゐ婢ハ君ゲキリストれため熱心に働きて迷へる者を救はれんゐとを切ゐ望み候願くハ聖靈間下れ言につきろへて聽聞人をして利益を蒙らしめたまハんゐとを願くハ多くの人キリストゐしたゲひて新き者

とあるに至んてとを
請ふ君罪人を悔改めさせんために熱心に神に祈たまへ神の
力い大なり誰り之に當るをねん神い其御子れ名をもて奉る
信仰の祈を聽くと約したまふ「汝等求めよ然らば授らん」とあ
り我等之によりて大に力を之て祈り求むるあり嗚呼希望い
樂き者なるうな神の御約束を思ひ見れば心もひきたちて勇
しくあるべうしキリストと其復生の力を心わ去るは如何に樂
き事あらずやキリストを信じて我等い希望をもて喜び天下れ
人ゞ皆主を去りて之を畏るるにいたれ時の臨むを俟あり
キリストの國の來らん時い如何わ幸あらんり其時にいキリ
ストの御心天に行いるごとく地にれあるれん又人い皆
キリストれ愛れ「マナ」を食ひ終日主とともに樂まん斯る時い



てれちわ樂園のいできたるあり婢い今よりして神とキリス
トの榮光のために力をつくさんとて勇を進めて事をなし候
婢ゝ會堂へまゐるあとを得ずして日曜日に此書を書いじめ
候私の只一人の妹は某の家わ泰公をりしゞ病にあり候わり
きて婢此わ來りて其代につとめ旁看病いたし候然るに妹い
今い早彼世の人と相あり候婢い君に請ふて妹に書を送りた
まへんてとを求めんと致し候彼い其身の往にし行爲の惡り
りしを曉り頻わ神の赦怒を願へり是によりて彼い救れて
天わのぼりしあらんと思ひて心を慰め候「主わをりて死たる
者い幸あり」といふを之を悅びしく候なり彼い主の晩餐を受
主れ死と苦難をおぼえんてとを願たり婢力れおよぶだけ彼
にをしへてキリストを心にうくる事の意味を去らせ候然と

身體の弱るに及びて〻彼再其事をのべざりき但し死ぬるまへに十分に覺悟したるやうに相見え候今は天國にをらんう然らば誠に幸に候

斯賤き物ゑらぬ身をもて憚もせで彼是と申しわげ候へども御咎ゑく憐ミて御労書を下され及ばぬ婢をおしへたまへを妹は死る時わ閣下れ手により葬られんゑとを望む由を申し候婢れ家れ屬する寺領の牧師〻差問ありて其葬式にのぞむ能〻ずと申し候妹〻某の地わ葬らるべく候ゑり彼〻火曜日に逝世り候金曜日か土曜日れ午後三時わ葬式をいださん と存ず君の都合わまかせんのミ此願を聽とゞけたまふや否や使者に人の返事をたまわりたく候らしく

エリザベツ、ウオルブリッ



我此書翰をみて其衷情の懇切なると熱心の厚きとを感歎せり其文は拙くして文字のあやまり多ゝり ゑゞ是にて彼ゞ身分賤く貧くして信心の高く秀たる者なるゑと解りたれゞ却て彼の人とゑりを慕しく思ふにいたれり余此書を得たるを喜べり殊にまた是る熱心の者其邊に多く見えざりゑかゞ別ても之をよろこびおもへり是につけても書面のやりとりの益あると明のゑり余〻斯人々ゞ書面をとりやりゑて其身を益せんゑとを望む夫信心深き貧人と書面わて交り或〻面をあ〻せて語りあふ〻心をはげまそのー助にて牧師たる者役者たる者等〻是によりて人を教ふるの道をまゑぶ事多し茲に我書面を讀おわりて其使者〻誰なるかと尋ねたるに門の外に待をるといふによりて乃ち出て之を見るわ頭〻雪ゝと思ふゞゝりに白く顔に〻

皺の波をうたせたる老人ありけり彼門によりかゝり涙をなが
してありゐが余のいたるを見て恭しく禮をゐして然て言ふや
う「僕女子の書翰を君の許にもち來り候斯く賤き身にて斯る事
を願へば定めて身ぞゐらぬ奴と御おもひもあらんと推し候」と
いふを聽て余答へけらく否とよ老人然いあらず若其事ゲ御前
の屬そる教會の牧師に對して不敬とゐるてとゐくゐ余い喜ん
で之をゐしてさしあげん」老人曰く「奴の教會の牧師い二三里先
に住いるふゲうへゐ彼日にい據ゐき用事あれば誰ゲ外に其事
をとりれゐゐふ者あらば願ふとゐろゐりと昨の日申され候因て
女子ゐ談じたるゐ閣下に願へとて彼書翰を認め候委細は書中
に相見え候ゐり」余乃ち老人を家に導きいれて偖て問ひけるや
う「御身の職業は何ゐて候や」老人答ふ「僕い是より三里ゐりな



る某の地の草舍ゐ年久く住をる者なり少の土地をゐりうけて
牝牛を養ひ乳をとりて其を度生の助にいたしをり候」余問ふ「御
身の家族い幾人なるや」答ふ「老壽たる一人の妻と男子二人女子
一人てれゐり候今一人の女子は只今みまゲりて候」余ろの言を
ついで言ふ「意ふに天國にたびだふれつらん」老人いふ「僕もかく
てろ望み候らへ彼子い姉のごとくい善き道ふすゝまざり志ゐ
と姉の勸ゐよりて救れしゐらんと存じ候吾ゲ此女子のおとき
子をもつい幸ゐ候娘ゲ勸るまでい僕い靈魂の事ゐどい然のみ
考へずゐをり候」余問ふ「御身い何歳にゐらるゝや」老人いふ「七十
歳にちうく候吾ゲ妻は尙年より罷りゐり我等いともゐ老ば
れて職業もゐらぬ身ゐ候ゲ娘奉公先より下り來て孝養いたし
くを候誠に稀ゐる娘に候ゐり」余答ふ「御娘子い始終然ゐりゐや」

老人答ふ「否まのらず彼い其若のり玄時は世の樂や衣服や遊戯に耽りたる者あり誠ゐ僕一家い皆物玄らずゐて常ゐ思ひたるい若此世の度世を謹みて人ゐ損害を蒙せずゞ必ず天國に入をえんと存じ居り候ひしゐり吾ゞ娘等も我等のごとく神を玄らぬ者ゐて世の欲ゐひのされたる者ゐり玄ゞ其二人の中長女い奉公にまかりいでたる先方にて一日某の會堂にて説教を承い其時より玄て全で變りたる者とゐひゐり候聞に其時教をとられたる者は牧師とゐりて殖民地へ赴ゐる〻御方なり玄といふ彼時より玄て娘い聖書をよむことを始め其行正しく相ゐり候彼始て歸宅にさゞりまゐんゐり玄時五圓の金貨をもち來りて是い給金の中よりのてし蓄へたる者ゐり年老ませを定て御用の事あらんとて我等夫婦ゐ交し候且彼申し候には衣服ゐ金を費



すことい外見をかざる愚事ゐをゞ重て以前のごとく之ゞため に心を勞せず寧金子をもて父母の恩をむくもる一端ゐ供せん

## キリスト少女ゐ恩をほどとしたまひたれゞ少女も斯せんことを願ふと申し候我等是をきいて大ゐ感じ彼ともゐをるを悦び候誠ゐ彼の氣質と行爲やさしく玄て以前とい天地の變易ゐり彼は我等の身体と靈魂ゐともゐ益をゐさんと心ゞけて親切に世話を致し候是ゐよりて我等も斯る不思議をおてす教なら也必ず倚べき者ゐらんとおもひつきて其より敬をきくに至り候然るゐ彼の妹は常に之を笑ひわざけりて姉の頭い其新規の思とともゐ餘處に向きたり等いひしゞ姉い答へて否わゞ頭ゐあらずわゞ心い罪を好むてとをやめて神を愛するの方ゐ轉きたり願くい御手前もわゞ如く一日今の身の危きことを知

るゝわいたらんてとをと申し候妹ハ是をきゝて我ハ姉の説教をきくを好まず我ハ他の人よりも悪きにあらざれバ是わて足りと應へ候わ姉のエリザベッと之わつげて妹よ御手前仮令わ説教をきゝぬとも我ハ汝れ為めに熱心に神に祈るべし爭か汝れを止めえんと申し諭したりしが此祈ハ聽きたりと見え候妹が病に臥たる時エリザベッ彼が主人の家に往て其うハりわ働き且看病して彼が靈魂の救の事をうたりきゝのせたるに妹も暁る所ありしと見えて大に以前の罪をくひ姉れ親切を謝びて救拯の道わたとりいると語し候よし承ハり候我等夫婦が見舞わゆきし時に彼其以前れ罪わ恥ぢ且之がために憂ふる由を言ひ姉れ救主が己にも救主とありたまとんてとを信ずと陳べ候是全く其身れ罪を見其身のハうあきを親りたるものにて斯



彼キリストに只管に賴ミ候あり彼娘今ハ世をさり候が僕ハエリザベッが彼を神わかへらゝめんと祈たる事の聽れたるあらんとおもひ候」と斯語り出たりけり此談話によりて彼書の事も明のおわありたれバ我ハ悅びて其願を容きエリザベッに懇意わあらんと望をたり是わよりて金曜日にゆうんあとを約し尙ゝらく其老人の今れ心の如何あるを尋て之をうへしやりぬ彼老翁は顏は皺ふかく髮と雪をあざむき目ハ涕ぐみ背ハかゞと其歩行もたゝのあらず後々と杖によりて進みゆきたり吾之を見て種々れ考をおてしたりゝが今わ尙悅びて其事屢心に思ひ出そなり斯て金曜日にあり玄のバ時刻をたがへず會堂わいたりしが暫時ありて葬送れ者會堂の門前わすゝを來りぬれバ余出て之を迎ふるわ老邁たる兩親と長子と姉わ親類の者拱哀

傷の樣子にて棺を送り來れり其中彼余に書を送りたる女子い殊に信心ふかき謙遜なる態にて余を老て一層感をおぼさしめたり斯て余墓場にゆきて葬式の文を讀たるが玆に一の有難き事あるをたを其事によりて益々わが敬會れ祈禱文れ尊きを知るにいたる其に別事あらず葬送に隨ひ來りし其村の人一人大に感化せられたる事あり此人に素より放蕩なる者なりしが此度葬式を見んとて隨ひ來り墓場まで俱にゆきたり然るに其人わが祈禱文を讀むを聽て大に感じ已の罪をさとめて終に悔いあらためたり彼此後全く變りたる人となりて常に此時の祈禱文の事を言ひいだせり誠に幸の事なり〻故に此日に永く心におぼゆべき日にして凡て「貧人の簡短なる傳記」を學んとする者の心に誌すべき日にあんあり〻る斯く此日に



リザベツの如き謹ふかき者と彼村人のごとき考あき者とが一墓におちあひしに深き故ある事にして偶然れ事に皆是神れ導あり然に神れ導に其あらんと思ひやられて恐ろしくりけり斯て葬式もすみしかば暫く老翁媼と女子とに談話をあして返りぬ其時エリザベツに其死去たる妹れ仕し家にゆきて之がかりの來るまで尚一二週間をらんとする由をのべて而ていひけるやう婢に彼處にてうまたは家にのへりたる後父の家にて閣下とともに此妹れ事を打語いんてとを願ふ」といひけるば復遠ろちあいんと約して去り途すがら此葬式の事を彼此考へみて家に還り貧き者を憐みたまふ神を讃め貧き者が信仰に富み富る者が心の貧くあらんことを祈れり

# 第二章

抑れのれが交はりたる友の既に死去たるときにおよびて其昔の交際を思ひ出せば屢心に喜をおぼゆることある者あり若其友が神を信じて世を渡りて終に寢りたる者あらむ此心如何ぞうり大あらんの夫天國あいたりて絶間なき幸福を蒙りをるあらんと思ゆる人と昔交わりたりし其時の模樣や談話を思ひ出る時は哀きが中に喜の心れありて彼大復生の日の事の思ひやられて樂しくあるものなり彼日あわ皆主の榮光をうむりて復と離るふことなきにいたらんとおもへば此事を望むふとのいやましして勵む氣のれてるも理あり是世にある間の貧富は物の數あらずろの貴む所わ皆神あありて王とあり祭司と



あるに在りとす是眞の貴き者なり牛乳屋の娘エリザベッも終わ彼世れ人とありしが是も亦主あありて死たる者にてありき其事わ後あいたりて知るべし偖葬送れ後七日ばりありて余エリザベッが仕へをる家を訪んとて往り其家わエリザベッの姉が前あ仕へあて死たる家あて今エリザベッろの代あ此あをる兹あ其家を見わたすに誠あ宏壯ある館にして山の麓なる美しき平地あ高く聳えたり其四周には何處にも樹木生ひ茂りて其景色誠に幽あり一目して其遺緒あるものあるを知るべし其家の作の古風なる格子扉や屋根の尖等にて去るし又家屋れ一方あは長春籐稠くはびてり て烟突の端までのらみのぼれり彼といひ此といひ皆古時を思ひいださむるに足る兹あ歩をそゝめて近より見れば又年代

の過ちく樣ゞ思ひ出らる昔より生れては死ゐ來てゐ往くゐ人の常ゐり誠に天地ゐ逝旅にして人ゐ客ゐりといふべしダビデ一時此事を考て言たるとあり（其言ゑ詩篇第三十九篇に見ゆ）云く「神ゐ吾命の日を手寬のごとくに定めたまふ神より見るなはせゑ吾年紀ゐ何もゐきゞ如し眞ゐ人は皆其完かる時ゐも尙虛き者ゐる而已實に人のゐすゐ所は皆むゐし誠に人ゐ徒ゐ勞するのみ自ら財寶を積と云ども其寶れ誰に歸そるを知ざるゐり」若し富る者其所有の定ゐきを思ひ此世の物の常なきを了らば如何に幸ゐらん歟富人ゐ其家ゐ萬世までも斯てあらんと思ひ已の名を其土地ゐゐつゞ等す然ども人れ榮は限あり人は滅び失る獸のごとくゐるゞゐし然ば其斯ゐすゐ愚事れみ然るゐ子孫たる者其言句を善とするゐ如何ゐや斯人等も羊のおとく墓に



臥て死れためゐ滅され其美は家をゑゐれて墓に消べし斯て家にいりて主人等と暫く談話したるゞ其話れ中にエリザベッゞ妹の看病怠りゐかりしてとの物語りを聽且其行れよきを語らるゝをきゝて大ゐよろてべり茲ゐ嘗て葬式の時ゐなしたる約束をふまんとて主人れ許を請てエリザベッゐ面會するエリザベッゐ喪の衣を着てをり其心の恬憺ゐるゐと顏にあらされて誠に感心にたへざりきエリザベッ乃ち語りいでゝ其妹ゞ死るまへに心をわらためて神にゐたゞひたる模樣ゐると談しけり彼ゞ勸と祈の效驗によりて斯幸ゐる結果れ生じたるは誠ゐよろゐべし余ゐ彼ゞ其事を語る樣の甚殊勝なるに感じて眞にゐれゐ清き敬の感化を蒙むりをるゐりと思ひたりき彼此後ゐ〳〵敬の事につきて余の勸をえんてとを願ひ且主ゞ萬事

を主とりて善あすゝませたまふあとを望む趣を陳べ其妹の死より余あちらづきにありし事の終に已と其父母の現世未來の益とあるにいたらんことを冀ふ旨を告たり彼い奉公の身あれば長話はよろしからずと思ひたとへ遠からず其親等を訪んといひて別れんとせしかども彼言けらく「閣下よ君い富る人と交ることを棄て辱あくも貧き者と語りたまふ是まことに有難し婢今そあし婢の心の中を語りまゐらせたく願ひ候併しあゞら後に御目にかゝる時申しあぐる方よろしんと存じ候今度御訪くださる時い婢い斯る宏壯なる家にいをらず卑き小屋ゐ罷りあるべし然なゞら其處ゐをるい斯上もるく幸にさうろふあり願くい神の恩君れ御身ゐあまねく及べんことを」と斯なん言たりける余是等の言をきゝて大いゐ滿足に思ひ斯る人と近づきに



なりしを喜ゐびて其所をたちいでぬ誠にエリザベツの心い理に通じ信仰にとめる者とおもいをたり是ゐつきて貴き人ゞ賤き者と敎の上の交際をあすゞためゐ大ある利益をうむるゐ至るべきことも思ひ志らたり夫「神い智者をはづうしめんと世のおろゝなる者をえらび强き者をしづのゑめんとて世の弱きものをいらびたまふ又神む有ものをはろぼさんとて世の賤きもの輕めらるゝ者すゐはち無ゞごときもれをえらびたまふ是凡の人神のまへゐ誇るゐとあうらんためゐり

此事屢世ゐれてるゐり（コリント前書一章二十七已下を見よ）我い何この考ふる事ゐる時は屢景色れ美き場所にもきて美景をなゞめゐゞら考をゐすゐとゐりければ是時も歸途の彼館の邊ある小山の巔ゐのぼりぬ此ゐ海の標柱あり其形三行塔にして石

あり余其許に坐りて四方八方の景色をあがむるに其美麗いんうたあし南にい六里ばりをへだてゝ山の峯巒長く渉り西に方なる山々ゝあ連ありて中に膏腴の平地を包む其平地にい麥田と牧場一面にあまねし余が上りたる山い此南と西の山々ゝの間にあり是平地に小川ありて此わまがり彼わくねりて數里が程あがをわたり其河岸あい樹木の生ひたげりたるあり麥や草の生高き岡ありて其上あい樹木の生ひたるもあり其一の岡の上にじたるあり稀にい灌木や蕨れ生ひたるもあり麥や草の生會堂たちをりて一層景色れ美を添ふ平地の中央にたてる小山の上に衞第の大木あり甚だ老き樹わして唯に往來れ人をして之をあへりみあむるのみあらず亦導船人の漂木とありて安然に港あいるをねせしむ又平地の面にい所々に村々農家第屋別



莊會堂等許多たてる見ゆわが坐したる山の此方あい是日わが訪ねたる彼館見えて其家の樹木と園の有樣美しく目ざましうり玆に東南をのゝむあ邊際あき洋海茫洋として日れ光其波を照し輝光まあとに燦爛たり又北に於てい海の濶一里より三里までの間あ出入して大河のごとくあ見ゆ卽ち對ふの海岸と余が居る此ツイル島の間にはさまれて斯見ゆるあり余が坐を直る下は樹木の生ひあげりたる美しき地方あり對ふの海岸の町々はかすゝに見えきたり許多の船錨をおろして泊をるも見も誠に言ふにいれぬ佳景ありけり又西の方あは山々ゝ相隨ひて海の波うつ樣に似たり此山々ゝ南あ渉りて彼平地を限る是等の山い多くい其頂上まで開墾したる者あて麥等澤山に其上に見うけられたり其中ある最高き山にいをりふし雲少しのゝり

居て善は見えざりしが其うへゐたてる燈明臺と古寺のごとき者のすがに目にうつり來れり斯ばかり勝き景色の其中ゐ坐りて余い竊ゐ思ひけるらく「抑人の罪のために樂園の有樣いに傷たれとも其景色の美と尙多く存す然も罪人の心神の大恩ゐよりて新にある時い樂園の有樣舊ゐうへりて見ゆべし此景れ山川海陸高低等の種々の模樣を一致ゐまじへて其美をせるが如く神の恩によりて改まりたる人の心も諸〳〵の思想一致に善くゐひまじいりて其美を顯すゐいたるべし」と斯るん思ひつけゐる斯して余平地にある村を見おろしたり其處いエリザベツの妹の葬られし所ゐり是ゐおいて彼葬式の樣ゐと思ひいだし又今い彼も天國にあるゐらんと思ひて大にエリザベツの働作を感



じたり是ゐつけても一家のうちに信者ゐりて家族の者を導く事の必要なるゐと知るゐり即ち余思ひけらくエリザベツい唯に妹を神に導くを えたるのみゐらず父母をも同く導くゐいたり又神の恩によりて他の人をもみちびくゐ至るべし人を引てキリストに歸せむるい誠に尊き務ゐり一同打ろろへて天國にむゐひて進むとてろの家い如何に幸ゐるらん願くい斯る家の日々ゐ增ゆゐんゐとを」

茲ゐ又左右の平地にたてる家々をゐゞめたりゐゞ見るにゐたゞひて感ずる心ゐおてりける嗟乎是等の人の中神の道をゐらず神の恩をゐらざる者幾何あるや是をおもへゐ斯る人をそくひにみちびくことを務めはげむべきゐり神は彼等を貴き者と見做たまふ然ゞ我等も之を然見ゐすべきゐりエリザベツも亦

此事を深く心に感じたりと見も彼れ「夜來ちん其時は誰も事をなそ能わず」と知て日の中に務んとせり其事ハ是後の書信や談話にても明のわ知る

斯て余家に反り今山にて思ひ考へたる事等を書にしたゝめて

エリザベツの許におくりやりけをべ日曜日の晩におよびてエリザベツの許より左のおとく言おてせたり

一筆志めし申しあげ候婢は今日會堂へまゐるゐとを之ず候併ゐゞら神れ何處にもまじまするをべ有りゞたし婢と何處ゐをりても神は常にともわいまそと思ひ候神の御前にあれべ樂園にあるゞでときゞ心地せられ候なり願くハ神の恩と聖靈二倍はと君にのぞみて君の今日の働作をあとゝく助けたまへ神ハろの御名をもて集る者の中に必ずあらんと約し



たまへり願くハ君ゞ此言の信ゐるを見明にいたらをんことを神の契約ハ皆まゐとに貴し我等は神の御言をうたゞふべゐらず神ハ決して人をあざむきたまハず若人信仰をいだきて事をゐさゝ必ず神の恩をゐうむるにいたるべし婢ハ今日君の懇切ゐる書翰を讀みて慰を之候婢ハ已ゞ國の教會ゐ神を愛し神の名を畏るゝ教師の許多あるゞために神に感謝し奉る人ゞ救を尋ぬる處に救あり願くハ人皆エ|ルのために救をうるに至れ願くハ神のえらみたまひし器ゐる君ゞ語るゝ言によりて人々の救ハるゝゐ至らんゐとを願くは君の言神の御手の器とゐりて迅き箭のごとく來りて諸〳〵の罪を射殺んゐとを余ハまてとゐ神の言をきくのみゐて行ハざる所の人々ゞ君の言ゐよりて感化せらをんてとをねゞふゐり閣下よ

神の榮光をあらいそとと人の魂をそくふことを務められよ然ば今の世も後の世も幸ひして君の得たまふ冠ゐ光輝のますにいたらん我等ハ「主よ天ゐおいて御使たちゞ主の御意をゐそぐとく地ゐわりて我に御意をゐさゐめたまへ」と言て主のために働のんことをねゞふ君も主の面をみて主よ我は此ゐをる又主ゞ我ゐたまひし人々も此ゐありと言ふを得たまハん夫善をゐそ時ハ必ず樂あり是天よりたまハりたる能力を用ふるを思ひて滿足べゞゐり然をゞ善をゐすを怠るハ不思議のいたりゐりといふべし竊にゝへりみて此身ゞ善をおてゐふゐとを怠り十字架を負て神のために働くゐとを疎かにせしてとゐるを思へゞ如何ゐかゐしゝらずや誠ゐ恥べきゐゞ斯キリストを人ゐ示すを恥たる時ハ神の恩の坐に近



くに憚りあり斷をゐそに安のらぬ思あり我等ハ互に愛して善をゐすことを命ぜらる想ふに神の事につきて心を合たる人々ゞ皆我等此世ゐてキリストエスにをりて交ハりて斯も幸ゐらゞ天國にいたりて御位のまハりゐて會ふ時ハ如何に樂しゝらんゝ」と言ふをうべし君よ婢は君と御内室とゞ共ゐ一の心をいだきてゐまさんゐとを望み候若然らゞ俱に一致出て今と後の幸福を來すの事をなしたまふを得べしキリストは弟子をつかはすに二人宛つゝハしたまへり是は互ひゐゐぐさめゐひ助けゐひて主の命をゐさんゞためゐりき婢ハ神の道を知て事をなす此年頃多くハ一人にて罷りゐり誰もまちハる者ゐく候然るのらに神の恩と愛を語りゐふ人を得ハ此餘ゐき樂に候ゐり神の限りゐき愛を天の使ゐかたり

つゞ長久にあるは如何に樂しき事ならんの閣下よ君は貴き人を措て忝けなくもわが如き賤き者と交りてたまふ誠ふありがたく候あり又神の余の其子を呼び聖靈より生れたる者とあし榮光にいるべき者とあしキリストと共に天國を嗣志めたまふ是いかゝる恩ぞやいかゝる譽ぞや是をれもへば務めざるべからず深く此事をうんがへ候へば幸福身にあまりて有りがたく此上の福をねがはず富を羨む心の更さらをあく候反て富る者が其大なるが如くに善人とあらざるを見る時は之をあはれむのみキリストの奴僕の形にて世ふいでたまひたれば之に似んてとてろ願しけれ請ふ嬶の過失をゆるし誤謬をあはしたまへ嬶の近々に家にかへらんと致し候へば家あて父母とともに君の御來臨を相待申し歡樂をつくすべく候あり〻しく

日曜日　　エリザベツ拜

リチモンド教師様

是の如き書をよみては感ぜざるをえず余ふかく感心をて之がためあ神あ謝したり「昔者エホバを畏るゝものたがひあ語りエホバ耳をかたむけて之を聽りエホバを畏るゝ者れよびろの名をわすれざるものゝためあエホバの前あわれば之の書を志るされたり」彼記念の書い尙閉ずにれきたまふ（マラキ三章十六ヲ見ヨ）

## 第三章

人の心い現在の事を考へ又過去の事を思ひいだし未來の事を思慮る等種々とあすが故に殆も活る繪畫のごとし久き先に見

聽したる事も之を思ひいだして今目のまへに見聞するごと思ふがごとくにあるとあり斯思ひいだす事れうちゐ喜てむしき事も多うり殊に神の道の上ゐ就て記憶は誠に道に進むの具ありとそ此の活画い望といふ者によりて復一層の美をますべし望は過去現在の事を未來にわはせ考へて心をはげまし遙うに遠うる契約を見て其眞を信じて之を已の者とす人心にかくのごとき思をゐす時神の靈てれをたすけめぐみて道にすゝまゑめたまふ夫心も體も皆キリストが買とり賜ひし者なりと思ふ時い其面目改まるゐり然べてろ使徒パウロい斯言たるゐれ

汝等の身い汝等ゞ神よりうけたる汝等の裏ゐゐる聖靈れ殿ゐ

ゐ去て汝等い汝のものにあらざるゐとをしらざるゐ其い汝等を價をもて買れたるもれゐれべなり是故ゐ神の者なる汝



等身ゐおいても靈魂にれいても神の榮をあらいそべし（前コリント書六章十九二十）

キリスト信者いかつて爲たる事ども を記憶して大ゐる益をうるとあるべし殊に已に沒去たる友と前に交いりたる事等を思ひ出そとと屢ゐる時い記憶れ力ゐはいに增べし夫一の事を思ひいだせべ隨つて又他の事胸ゐうゐそて遂に樂き心に相成べし或歌人の言けらく

頭なる、腦の中の、千五百房に、われの思想い、みゐともに、見えぬ鎖に、彼と是、繫りりゐも、靜りて、臥てゐあなる、然るのちゐ、一箇れ思想、喚起ゐべ、百千萬と、皆ともに、起いできたり、互ゐも、入ていのとり、種々に或い喜樂、或い又、悲哀を去も、心にし、おぼえしめつゝ、もろともゐ、あひありまりて、はどよくも心の線を、しら

べつゝ、治理むるあとゞ奇しのりける、

然も我いま技わゞ嘗て彼牛乳屋を訪ねたりし時の模様を思ひいださんとす願くゝ神の恵により此事我れ益とあり又之をよむ者の益とあるにいたを

前に掲げたる書信を得たるのち暫時ありて余始めてエリザベッの家わ到る其路ゝ細き田舎路にして胡桃あとの樹兩側わ生茂りて日の光を遮ぎり又花や灌木や若木等いりみだをて誠に美ゑ其邊に處々に大岩あり泉れ音潺々として其中より流いづるもありて其景眞わ佳あり又道の卑き處よりして遙か遠くなる景色も見えて高山の峯あゞと望むべし峰の上にゝ石碑燈明臺あゞれ立る見ゆ且又麥田の黄みたるも處々わ見えたり又路の高き所わいたれば海わ船の鷗のごとくわ浮ミ渉れるも見ら



然ゝわれども此路ゝ多くゝ樹蔭わおはれて見るわ心の清々しく觀念れ心頻りわ催ふさる嗚呼天地萬物の美を觀察するを知ざるものは如何ばかり損なちんゝ造物の神ゝ萬物をもて其榮光をあらゝしたまふ誠わ萬の物皆神ゝ我を造りたまへりと言て神の榮光をのぶるなり技に余牛乳屋の家に近づきしに彼老人は二頭れ牝牛をれひて小屋わおもむく所ありしゞ其目かそをれを余を見つけざりき余すゝ近くよりて聲をかけたれを驚き我てをみ悅ばゑげの面わて言けるやう「善あろ來ましたれ有りゞたし此週間ゝ毎日君の御來臨を待をり候」とゝく言をはると等しくエリザベッ家へれ戸をあゞて母とゝもわ出きたり喜悅の涙をうゝめて我をむかふ我即ち馬より下りて奇麗ある小庭園にちびりれていりぬ其處に楡れ大木二本たりく

聳えたり其家れ内外ともゐ奇麗なり爐れ兩旁ゐ古き樫の圍手椅二箇あり是い翁爐二人ゲ業務ををへて休むとゐろれ者ゐり隅の架に聖書二卷と外に敎ゐろいをる書物數冊あり其間に窓二ありて一の窓よりい山や森ゐと見ゆ又一の窓ゐい葡萄の蔓半ゐらみふさゲりて其葉のあひだより日の光照しゐみて内をあまねく照す余之を熟々見て謂へらく「是い信心と平和と知足(滿足)ゐ適ひたる住所なり我も此ゐ來りたをゞ神れ惠ゐよりて是等れ德ゐ進むべき敎を此に得んてとを願ふ」とうくゐん思ひたりける時ゐエリザベッ言いでけらく「閣下よ我等い君の來臨にゐづゐるべき身分にゐらず然るに君い遙々と來りて訪問たまふ誠に有りがたく存じ候」余之に答へて言ふ「ゐをらの主キリストい更ゐ遠くより來りて我等罪人を訪問たまへり即ち



キリストと天の父の懷をいなれ其榮光をすてゝ恩と愛のため此世に降りたまふ若我等キリストに從ふといふならバ互ゐ助けあひてキリストのゐされしごとく善をゐすべきにゐらずや」と斯語をる時老人もいりきたりて余に挨拶そうくて談語の中に直に彼死たる女子の事ゐ及びたるゲエリザベッの信心と愛情い其言れ上にゐきらゐ顯れたり又彼と只田舍れ貧き人の女子ゐありしのとも奉公にいりたる家々ゐて禮儀作法をゐらひればゐたり但し信心ぶのきゲために誠に謙遜ゐりき彼は我の到れるを幸として其身と父母の利益ゐなることを聽んとしたりしのとも其振舞誠ゐ禮節にゐひて見ゐくゐらず彼ゲ如きいキリスト敎徒の堅心と掛念ゐ婦人の温柔と女子の孝行を兼たる者といふべしキリストを信ずる者いのくゐろゐらまほし

けれ余亦エリザベツの働作の空らずして終に其父母をキリストにみちびくわ至りしを見たり斯彼がつとめたるい眞ふわゞたし神もし御恩をもて子を父母より前に召たまいゝ其子ゞ父母を神にをちびくべき務い如何にれはいあらんのエリザベツの如きは其務をりぐしたりといふべし誠わ是翁嫗等い女子エリザベツをバ神の道をしめす教師と見做したりと見ゆ斯のごとくあれとエリザベツと又孝行の道をりくし何りに父母の世話をおしたりエリザベツの信仰と道わうあひて尋常ならず彼は神の罪人を救びたまふの道を明のにしりて聖書の其教わ委しのりき彼又是まで信仰にすゝみ來りし履歴を語りしゞ眞實の信仰の如何なる者あるゝを善ふれると言の上にわらいをたり彼い神と云たゝむ事い重に愛ふよりてキリストに



似んと志すごとく信仰によりて又キリストの中にをるに在と信じ又神の罪人を愛したまふ愛心と罪人のあすべき本務は更ふべうらざる性質の者ゝりと信じたりエリザベツは彼を信じ頼み是わ遵ひ行ひて神の平和をえんあとをねゞへり彼聖書の外にい只數冊の書をよみたるのをゝれども其書物い皆善もの おして善く其書の言ふ所をよみわけて之ゞ價値を云れり

此時エリザベツの顔い青白く見えたりゝゞ是ゞ肺病の前徴ありける因て余謂けらく彼長くい世ゝあゞらふるあたいずと偖うく樂しく語りて數時間をへしゝを家にのへらんとおもひて暇をつげたり是等の人の人とゝりは其別色の挨拶の言にても云らるべし老母の曰く願くは神君を安然に家にりへら云めたまへ又君ゞ來りて我等貧人を訪ねたまへる今日の日をめぐみ

さちはひたまへ請ふ復來りてたまへ我い無知にして君の如き御方と應接をえざるとも娘がうりて御はあし申さん娘い老の身の此餘あき慰藉ゐ候只神が娘を世ゐれきて吾身の死るまで杖柱とあらゐめたまいんあとをねがふあり」余てたへて云ふ「神は我汝が老るまでも汝の神とあり汝が白髮にいたるまでも汝を懷き負ふといひたまへり（イザヤ四十六章ノ四節）此御言を信ぜらるを」娘即ち言ふ「君が婢と婢の父母ゐ親切をつくしたまふを感謝したてまつる君の今日の御訪問に神の思くだりゐと信ず婢之を感じ候父母必ら之を心ゐゐるし候いん吾が救主キリストは燃る木を火の中より引いだすが如くに吾をひきだして生命の道と平和をゐめしたまふ誠ゐありがたし吾は主の榮光をあらいさんてとをねがふ又父母が神を信じて福祉を



うるゐいたらんてとを切ゐのぞみ候」余答ふ「黃昏ゐ光あらん（ゼカリア十四ノ七）との言今此段おれいて成たりと思いる」エリザベッ言ふ「婢其を信じ其幸の望のために神をあがめ候」余言ふ「御身が父母を光ゐみちびくの器たりゐを神ゐ感謝せられよ」彼言ふ「然致し候然れども吾が身の足ぬ所を思へゐ喜びつゝも慄へ候あり時ゐ老人言いでけらく「主エホバ必ず君の此親切ゐ報いたまいん我等い老たる者且罪人あれども神が此十一時にゐいて我等に恩をはどゐしたまふ樣に請ふ君神にいのりたまへ」エリザベッい身と心をもて我等のために働き候彼い一日乙たらきて我等の勞苦をたすけ而して又我等のためゐ聖書をよみ又勸め斷ゐとして我等を云て神の怒をまぬゐれ云めんとす彼いまゐとに稀ゐる子に候ゐり」斯たがひに打ゐたらひて別れ來

り玄ゞ歸路に是等の事をおもひてよろてびて家にいりぬ此後も尚玄ゞ訪問たるてとあり玄ゞ常も喜悦を之たり然るわ一度久しく牛乳屋の人等わ會ぬわいたりしあとあり其時エリザベッ左の手紙をおくれり

拜啓其後ハ無音わ打過ぎ候婢ハ久しく閣下より音信を之んてとを望みをり候然りらに今また書面をさしあげ候不遜の罪は幾重へわもおゆるしわつてたまハをよ婢ハ某の處を去てより已來家にのみ多くハてもりをり候彼日寒氣をひきて其より次第わわしく相なり候なり此頃の天氣よき日わハ外にも少しハ出候へども此有樣わてハ迚も長くハ世わあるまじくおもハを候願くハ神わ榮光わを世をさりて神とともわあらんと思へゞ樂くもはべるゞのし我ハみづから罪の働作を



れば之てうれふれともエスハの御恩を我わはとてしたまへゞ我ハエスの御物を信じをり候歌人の言に

わゞ靈ハ、エスの言に、てのの土の、のちだをはあれ、よろてびて、耀く道を、むゝりつゝ、すゝみてもとめ、わゞ神わ、わひたてまつり、長へわ、樂き國わ、あらんとし、おもへゞいとも、たふとうりけり

とあるも實に此時の事とゞんじ候婢ハ恒に神によりて生きあゞらへ神のめぐみわよりて樂き心を懷きをちんみとをねゞひ候なり然らずバ生るも死るも幸あらず候我等わハ此平和をさまたぐる多くの敵あれバ恒に醒醒し祈りて此平和をたもつてとをつとむべし婢今はよわりて何處へも敎をきゝわいづるあとあらず誠わ殘念わゞざさふらう去日曜日に閣下ゞ某の處にて說敎なされ去を聽たくは思ひ玄のとも歩み

ゆくてとならずして心ならずも打過候定て君が言わよりて幸福を受たるもの多からん妙は深く其事を神われがひ候然あがら歎いしき事には世の人は一度よられたるのみにては其睡をさまさず候然しあがら説教者が聖靈にかんじて熱心おありて懇ろ生命の言をのぶる時い神の言甚だ力ありて人を感化す斯る時い神の言我等に諸の事を示し我等の心を明かにして黒暗の事等をあらわしし神の實藏より新しき物と古き物をいだして與ふるあり我等い神が其御意おもたがひてわをらの中に働きたまふやうに願ひて忠勤の僕のごとく務めはげむべきありわをらの主人は善き者おましませど必ず其愛の働作を忘をたまはざるありとあるべし我等もし彼天にありてとれらをまつ榮光の冠に目をかくるあらば善をあ



すに倦てとあかるべし只ひたすらに忍耐と喜樂をもつて神の道に歩るべきのみ然れど此世の些細物に心をうばるれて神に遠ざかり魂の福祉をうしなふがごときあらば我等の信仰をもて神の子によりて生るあらば亦人をそゝめて神を求めさせべきなり我等はエスがわれらおなさをし事を人おりげ又エスが其人のためにおさるゝ所をつげおちすべし又真の信者おは樂き望のあるものなるをおめすべしわれらの心斯神におもむきをる時はわれらい神を崇め其恩惠を心おおぼゆる事まそ〳〵深くありもきて決して彼富人が自已の尊榮を求むるがごとくあらず神が世の大罪人をよろてんで救ひたまふを思へば我は此身が其務おを怠るを感じて歎き候夫愛の神いりく見たてまつる時は如何に愛すべく我等罪

人に見えますか誠にいひつくしがたしのくのごとくわ考ふる心ハいろに幸なるろあ某の死去てよりのち婢とつねにかくのおとさ思をいだきをり候ねがはくハ神我れいたらぬとおろをもるしたまへ我は彼人に語り且書をおくるをわが身の義務とおもひ候其事にハひていつゆや御ゑあし申したるあとハさだめておぼえいまするあらんろるに尙便よきときをまちて之をなさんもれと待をり志に豈はからんや神ゑや くも其人を冥土にいたらせたまへり我はまあとに其あるろざしを行ハざりゑを悔てなげき且はゆいり候今ハすでわ遲しいろんせんや是わよりて主の志めしたまふ時ほど善き時なきを知り候あり若わを彼が存命中わ之にキリストの贖をのたりたらゑ彼がきくときぬわ關らずわが責ハのがをし



なるを斯ありたをがせんすべあし我もし神がのく彼を急わとりたまハんと知たらば幾重ふも働きて彼をすゝめしあらん但し神ハ我等のなすべきことを示したまふ神の自らなしたまふ事ハゑらせたまハず是まあと心に十分あり請ふ君ハとめて神のさかえをあらハしたまへ時は早くすぎもくゆゑし我等ハとはゆらず天國の樂き安息わいるべし婢ハ神が熱心と愛を君わみたしめ日々わ人をキリストわ導ゆせたまハんことをいのり居るあり願くは神大膽ある心を君にさづけて人をおろるゑあとあゆら志めたまへキリストゑ其忠信なる役者と世の終までともわわらんといひたまへり之をわををたまふなゑれ危難わふ事多々れがキリストれ助をうるあと愈おはいなり然ば畏るべきものは只キリストわして外わ

む絶てゐし婢の弱き身と弱き心ゐキリストの大いゐる力のあらいれんゐとを神にいのりてたまいれよエスゐければ何もできず候之にひきうへて聖靈の教をうくる時い他ゐ師匠はいらず候なりねがむくい神聖靈を君にたまひて神の恩ゐうるはは云めたまいんんてとをねがはくい君がキリスト、エスにありて神の愛の高深、長、寛を志るゐいたらをんゐとを右いおもふ所をあらく申しのべ候あり請ふ凡てのあやまりをゆるしたまへ

うしく

月日

エリザベッ拜

我おの書および其他エリザベッがれてしたる文をよみて考ふるにエリザベッい謙遜ある弟子のごとくして亦忠實ある諫者のごとくあり是まてとゐ妙ゐありといふべし



## 第四章

夫罪人が黒暗の權威をのがれて神の愛子の國に至るはキリスト信徒の喜にして天の使の感歎するとゐろあり凡て罪を悔て赦されたる人い皆救主が罪と死と墓に勝たまひし事を証するなり嗚呼其變化如何に大ゐるや怒の子が恩の証人とある即ち火の中より燃柴頭をひきいだしたるがごとし奇ゐる哉人キリストにあるときは新ふ作られたるものあり舊はさりて皆あたらしくゐるなり信者の經歷をたづぬをば實に驚くにたゆ其人いダビデのごとく多くれ人をおどろかすあり但し自らおどろきあやゐむてと殊に大あり他の人は疑ひもせんゐれど信者たるものい最初より終まで恩にて救れしてとを堅くみとむるあり眞正のキリスト信徒の性質等は吾國の教會にて言ふとゐ

ろに善くあらゐれたり即ち神の恩と慈悲の及ぶとゐろの者の事を言ふ時に吾教會ゐて言ふとゐろゐ左のごとし「神れ斯る貴き恩をかうむる者は程よき時に神にめさる其人ゐ恩によりて其召に応たゞふを之神に義とせらを神の子とゐるを之神のひとりごエスキリストの形に似ることを之信仰をいだいて善をゐそを之終に神の恩ゐよりて限なき生命ゐいるに至る」

凡て信心ある人ゐ斯神の智恵と權能と愛心を考ふる時ゐ此餘ゐく喜べしくれぱゆるゐり是ゞためにろの人ゐまず〳〵信仰をゐたうして神を愛するゐ至るべし茲ゐまた他の人の上にあらはるゝ信心の光を見る時はまゐとに樂しゐ吾いま此ゐうきゐるそエリザベッの身れ上ゐゐゐキリスト信者れ喜樂と盡力いちゐるくゐらゐれて實ゐ殊勝なりエリザベッはエスゞ道ゐい



まし眞理ゐいまし生命にいますゐとを深く信じたれぱ之を人ゐも証據せんと望そたるゞおとし彼ゐキリストゐ傚ひ善事をゐして人々ゐ其身ゞ神にめされて義とせられて神の子となりたるゐとれ眞實ゐるを志めさんと願へり彼ゐかく信じゐたゞひて終ゐ神の恩によりて長久の福祉ゐいたらんと信じたり我ゐ已ゞ住たる寺領の外に今一の寺領をゐつゐりゐたり其寺領ゐ小き地にして人のゐずも寡し其處れ會堂ゐ小山れ上ゐゐりて此ゐいたる四方八方の路ゐ皆格別ゐ面白き景色をゐゐへたり其一筋れ路ゐ海岸より田舍屋の中をとほりて上る者ゐり又ろの一筋ゐ隣山の傍をめぐりて來る其ほとりに多くの羊草くひをり又今一の路ゐ高岡の間をだん〳〵ゐのぼりきたるゐの兩側ゐ種〻の草木おひゐげりて花もさきみだをて美し我ゐ

去むゝ是等の路の皆見ゆるとてろに上りて其路々をのぼりて會堂へきたる人々を見たるおとあり期人々ゞ神の家に上りきたるを見る時ゝ種々の喜むしき思もれおりて實ふよし一日禮拜のまへにあたりて暫く彼處おのぼり見し時ダビデがいひあらはしたる喜樂をかんがへいだしたり其言ゝ詩篇百二十二に見ゆ云く「人我に語りて去來エホバの家にゆかんといふ時にゝ我喜べりエルサレムよ我等の足ゝ汝の門の内おたゝんエルサレムゝ稠密け邑の如くに建つ諸の支派此にのぼりゆく即ちエホバの支派イスラエルのために證詞をあしてエホバの名を頌美む」

我是に於て禮拜の益を感ずるに至りて謂へらく幾何の救れたる人今此ふ祈と讃美をあさんため神の言をきゝんため生命のパンをくらゝんためふ集りをるよる彼等ゝ各其家をとゝおれて今祈の家にあつまらんとす是まゝとに善牧者ゞ野の四方より羊を牢によびあつむるの樣を美しく描せる者あり此野山を男女や小兒ゞ覆て近よる其ごとく多衆の人東西南北より來りて神の國に坐するおいたらんと斯おん思ひつゞけたる丈誰ゝ斯る時の貴重を善くはゝるを之んや即ち天の平和をまゝぶの時神ゝ事るの時罪人をすゝめて未來の罰をのゞれゝむる時無知の者をゝまへて生べき道と死べき道をゝらゝむる時貧き者に福音をゝたふる時心のいためる者をゝぐさむる時擄人に釋放をつたへ盲者ゝ明をうるの事をのぶる時斯のごとき時と豈たふとゝらずや詩篇八十九に云く「此嘉しき音をゝる民は幸ゝり エホバよ彼等は汝の顏の光にあゆまんエホバの名によりて彼

等はよろてびエホバの義おまりて彼等を高められん」とまことふ此事あり是において我また神が罪人をすくひたまふ事にりいて役者の職の大切なるを感じたり因て我神が我にまのせたまひし人々が我の怠のためわ迷ひて牧者なき羊の如くあり或ハ盲者わ案内をたる盲人のおとくあらざるやう窮わ祈り常わいつも福音の眞理をありのまゝに人わつげて神の榮光をあらハし教會れ盛にあるやうに務んと思ひさだめたり茲に不圖見おろせば會堂の路に彼牛乳屋の老人あゆみ來をり獄ハるゝ參りハせじと思ひしに感じいつたるあとありけり老人は片手ハ杖により片手ハ一人の若き人おもたれてのぼり來る彼若者もわが知る人あり彼等二人ハ神の恩惠をかたりあひをり去が老人ハ去きりに神が其女にたまひし恩をうたりてエリザベツを



はめたり時に我其人等の許にもきて會堂へつきだちもけり老人云ふ「奴ハ娘の所より手紙をもちまゐり候禮拜の時刻にれくれじといろ〳〵候此老の身にハ七里の道ハたく候あり但し御目わうゝりてまてとわうれしく候」我言ふ「御娘子ハいのぶわ候や」答ふ「まてとに惡しく候醫者は癆瘵とまうし候善あるかと思ふ時もあれど亦心配に相成り候君のあらるゝごとく我等ハ娘を愛する理あるものなきば如何にわなしく候ぞや但し神ハ善やうになしたまハん我弱きをゆるしたまへ」といひて書翰を我わわたせり然るにはや禮拜をとじむべき時あり去りば之をよむあとハ後わのゝしぬ此老人が禮拜につらあり去がために誠わ喜き思おありて大によろりき此にハ富者も貧人もともにわつまりて神を主とわふぎ皆もろともわ神にたよる者ありと去り

て一れ父ゐねゞひて今世未世れ福をいのる其次ゐいたれば富人も貧人も皆墓ゐれいて一緒ゐゐるなり又ろの後にい富者も貧者もみゐひとしく神の裁判の座のまへにいでゝ其行爲の善悪に応たゞひて報をうべし此三時いふゞくゝゝりゐふ者ゐりといふべし

斯て會を散じてのち我牛乳屋の老人および其に類する二三の貧人と物ゞたる彼老人い娘れ事をいいでは長く語るをえず即ち神ゞろの孝女をもて已ゐはとてしたひまし恩の大ゐるをのべたり凡て眞の信者い皆已を神にみちびきたる人を愛するものゐるゞ若其人ゞ親子のごとき親き者ならば其愛情いいのならんろ老人其家の事を人にものゞたるゐひだゐ我手紙をひらきて讀むに其文に云く



憚り乍ら復もや運ぬ筆をはしらせて再び貴覽に呈へ候先日い能々御労書を投じ下され感悦斜ならず贓ゐゐりゞたく拜誦去奉り候婢は此頃身体よゝり來て歩行も思ふまゝゐらねば會堂へもゆのれず応て家ゐのみ罷りゐり候此迄會堂へまゐることを此餘ゐき樂みと思ひをり候ひしゞ斯なりゐたれば今いぜひゐく候なり誠ゐ婢い常にわゞ神に會ひたてまつるを喜びて主の日の來るをまちゥぬる心地志つゝ勇みて會堂へまゐり候夫神の恩い千尋の海の底よりも深くして顯ふ者い皆其御恩を蒙るゐとをうるゐり抜ゐ過にし事を考ふを會堂にて是迄常ゐ神の愛を心に滿たる熱心の教師ゞ神の恩をうけて宣らをたる言を聽たる時わゞ心のいゥに嬉しく悅しかり応の思ひいでられてゐづゥしく相ゐり候斯る教師

の顔い彼昔モーセダシナイ山よりくだる時に其面れのゝやきし如く光りゝやく樣ゐ相見え候然ばわゞ君もモーセゞ神に倣ひしおとく神にゐらひまして主ゐる神ゞ君のうちにましますごとく君ゞ神の靈によりて神の中ゐいまそてとを人々に示ら示めたまへ願くい君神の榮光のために事をゐさるゝ時ゐ神の敵と助を蒙りたまいんゐとを是婢の望ミに候ゐり

數ゐらぬ身をもて斯る事を申すい嗚呼ゞまゑくして憚ゐきゐゐもあらねと是も心れ眞情よりいでたる者ゐれば咎めずて聽たまへ婢い常に君ゞ神の靈の働を心に感ぜらゑ又行爲の上ゐ之を認められんゐとを只管神に祈り且君ゞ萬事をキリストの貴き血ゐゆだねたまいんゐとを主ゐねゞひ候君も



し斯なりまさゑ神の力によりて諸〳〵れあしき事にうち勝ち彼歟人ゞのべたるごとく言ふをえたまゝん

世をおろれ、靈の道を、彼是と、まげもすべきゝ、言にも、行爲にもたけく、わゞ神の、証人したらんゐ、

人にれぢ、神れ言を、うくしゐば、神の御前ゐ、いかにして、出てたゝんや、御怒を、如何ゐ避んや

世の人を、憚りつゝも、汝ゞ言を、柔げのべて、白銀や、黃金をえんゝ、十字架を、負てゆゝんか、

わゞ懼れ、えゝりゐすい、何者ゝ、人か水泡ゝ、死れ刺を、のゞきぬ人ゐ、もゝ〳〵の、罪の僕從ゝ、

斯る人、怒らゑ怒を、我は汝ゞ、袖の下にし、いりぬれゑ、何ゐおゝきん、汝ゞ愛は、吾をゐくまふ、

キリストの、其いつくしみ、世れ人の、まよへるものを、尋ねつゝ、引てゝもとり、涙もて、そくひてたまふ、

我の名は、ろしらべろ云れ、十字架を、我身はもちず、嘲笑は事ともせずて、神をのみ、おろれ畏みむ

願くゝ君其職務の重く、貴きものゝあるとを心に去りて神の道ゝあゆゑ萬の事ゝ神をよゝびたゝえ牧師の職ゝ居る人ゝ最高き神の使者ゝり然れゝ君のごときゝ人ゝ天の使の如く聖くして愛情と熱心をみて、人の靈魂を神にみちびくとを務むべし斯言ふも言ひとぎにゝあらじと思とを候誠に斯る人々ゝキリストにのゝりて罪人を神にゝへら云むる者ゝり然のらに君等れ職務ゝ天れ使のつとめより重し天使ゝ神の國ゝ入たる者れために事をなそゝをぞも君等ゝ人をちびきて神にゝへら



去むるゝれゝ君等の務めは先にして天の使のつとめゝ後ゝりと云べし夫牧師たる者ゝ日々ゝ人をキリストゝちびき歸んとて務らるキリストゝ天にのぼりゝたまひて罪人の爲に神ゝとりゝし其身ゝ罪人にゝりて死たる績をもて人の罪をゝゝんと去給ふ然ゝキリストと牧師とゝ靈の働ゝ依て誠ゝ俱ゝ働く者なりといふべし然ゝいへどもキリストゝき時ゝ吾等何をも爲をえず我等の力もキリストれ力ゝしてキリストゝ眞に始より終まで榮光の歸する所ゝりとす願は君活る信仰をいだいて神れ為なるキリストゝ堅すゝりたまへ父と子と聖靈ゝ樂き交をなしたまへ謙る愛心をもて深去づと神の生命によりて高のぼりたまへ是わちはゝ君れためゝ斯り求る所ゝり斯去たまゝゝキリストの美さと其長の

榮光明を見て君の心を眞の喜悦をちわふをん若われらはゞ信
る所まてとにして過るくゝわらいもみづから世のなゝの諸
の財室よりもキリストの恩惠を蒙らんとをねゞふキリスト
の恩をと此世の財寶とをくらふる時ん世れたのらは價値を
くして然のを心をのくべき者にあらず之ゞためを氣をひか
れて神をはあるゝゞごときい決てよゝらず神あゝ心をつく
して愛したてまつるべきものなを然ゞ何事をあすにも神の
御目のまへにあすと思ひて愼みてあし罪をおちいらぬやう心
ゞくべし且キリストの日をまし已れらの目に貫く見え來る
やう又われらの心を愛すべく成り來るやう神をねゞひ求む
べきなり
神の人を愛したまふ事をかく拙く書つゞる間われらはの心に



ん有難き思想みち候過にし時のわゞ過罪と是までの神の恩
惠とをゝんゞへみれゞ神の愛ん誠を大をして假令婢に智者
や天使の智力あるも迚も之を十分にのきわらはすてとを得
じと思ん者候斯るをとん人に語るよりん寧心を思ひたの去
む方然るべし嗚呼思ひめぐらせゞ人んみる神のゝゝる深き
恩をうくるにたらぬ者あり神の恩ん誠を廣大無量なるのる
婢みづゝら己の心の穢きをおもふ時は屢力をたとすみと
あり然ども信仰と希望とをよりて復心をひきたて使徒の祈
のごとく神ゞ其をたまの賜物と恩惠をもて我にみたゝたま
んんてとを願ひ且わゞ神れ心にのあふやうに凡て清き行爲
をあし神をかゝあみて正く世を度るを至らんてとを求む
婢若餘を言過たるあらゞねゞんくん恕したまへ請ふ此次に

書翰を寄らるゝ時にわらいれ過失をたゞしわらいを勸めみちびきたまえ婢い只祈禱をもて君の厚情にむくゆるを得るれみおをゞ只管に君の御家族れ皆神の恩にうるおひあさるやう神ゐいのり居り候婢考ふるにキリスト昔ペテロに問たまひしおとく君ゐも亦汝我を愛そるや」と問たまふ願くい君も亦「主い知たまはぬとゐろなしわが汝を愛するゐとい汝ゐりたまふ」ヨハネ傳第二十一章十七

ストの羊を牧ひ愛と謙遜と熱心をもて萬事をゐしてキリストゐ其ゐるしを去ら去められよ願くい君熱心にてたらさて罪と惡魔の城をたゐしキリストの教會を建てたまへ義の種をまきて神ゐ求めて百倍の實をゐたまへ願くい君の行爲徒ならずして其まゝる種の芽みいでゝ遂に花さき實り天ゐ



いまゝ神の御榮光とゐるゐいたらん事をイエスい君を慰めんためゐ斯のたまふ「罪人を去て其惡き道をはゐれ去むる者い靈魂を救て死をまぬゐれ去むるゐり」ヤコブ書第五ノ二十

くゐれゞ君の冠のゥゃやきい榮光をまゝそべしキリスト其忠義なる役者のためにゐくゐしたまふゐり

望らくい君罪をゞ見るゞまゝゐ責め戒めたまへ必ず神れ助ありて畏懼と恥辱とは御身をゐゐれてさるべし君の行爲に去たゞひて神ゐの大ゐる平和と智慧と力と勇とをゐたへたまいん君いパウルのごとくゐりたまふべし卽ち博く學びをらるれゞ神の助によりて上下一般の人に道を去めすてとを得たまいん願くい神の榮光をおもひて決して人を恐れたまふゐれ人の此世れ譽よりい其靈魂いはるゐゐ貴く候ゐ

り且又君い諸〻の病る者を見まふあとをうるの地位ゐゐたまふ夫人の艱難い去べ〻神の機會とゐるゐとあり然べ君うくして神の行爲をゐすの器具とゐりたまふべし神い器具を用ひずに事をゐすをゐたまへども常ゐ器具をもちひたまふ婢い敢て君が神のゐらみたまへる器具とゐりて其名と眞實をゐまねく人に傳へられんことをれぞむ病る者をみまふい神の命ゐしてキリスト信徒のゐすべきことなり病る者をみまふより去て如何なる善き事が生ずるもはゐられず候然るゐ此事を疎にそる者ゐるい歟いし世ゐい會堂にいでゝ敬を說き教をきけば其務いすむと思ふもの多し然ども是なほ足ざるなり願くい神人を去て其己と同じ儕ゐる罪人を憐むの心を起さ去めたまへ生命のある間は望のある者ゐれべ決して



人をみそつべからざるなり

請ふ婢の言ふとゐろの過をゆるしたまへ願くい神萬事にゐいて君をめぐみたまへ殊に君が婢と婢の父母ゐ交りたまふ所に恩をくだしたまへ嗚呼一家族の中に神の教を傳へのふるい樂みゐるゝな君のねがひも然ゐらん歟婢の望い誠に左の歌のごとくに候

わが神に、われとわが家と、皆ともゐ、事へんなれど、わが身まづ、神のてとべゐ、去たがひて、行爲と言と、氣質もて、天ゐる神に、つかふるを、去めすべきゐり、

わが家の、人のまへゐし、善き儀表、たてゝ見せりゝ、もろ〻の、門まづくものを、とりのけて、わが行爲ゐ、ひと〻の義務を去めし、愛の道、ゐらいすべきぞ

柔ゐ、心やさしく、たちまちに、解てやはらぎ、わが神ゐ、ゑたが
ふもれい、かくあろと、わが家れ人に、ゑらせつゝ、皆もろとも
ゐ、天の道、のぞみていでん、

キリストの、きよきおん血に、きよまりて、親族を、すゝめりゝ、
妻もあども、僕婢らも、皆ひきれて、天へとて、樂き道を、喜
びて、進みてぞゆく、

人の交際もたゞ〳〵に罷在候へど書物をのみ伴侶といたし
居り候殊に神の愛を志るせる歌い婢の心を悦べせ候なり然
るからゐ斯は長々と人の歌をひきも致し候わらはい若し成
いゐ數日のうちゐ某れ所に到んと存じ候斯申そは事ゐより
て來る一週の中に君ゐゐひたてまつるゐとわらんとての事に
候ゐり然ゐがら君の御來臨を蒙らべわらはの父母の益をう



ること大ゐるべしと存候

うしく

月　日

エリザベツ、ウオルプリン再拜

レイ、リチモンド教師

閣下

我之をよゝをいりて言けるは「此書をもちきたらきしは眞ゐゐ
たじけなし御身の娘子と御身と我とゐとりてい忠實ゐる諫者
親切ゐる友ゐり請ふ御娘子にゐたりてたまへ我はまゐとに其
書の言ゐ感服いたしたり此上も志べ〳〵書面をたまいらたいよ
〳〵ありがたくぞんずるゐり」と語るをきゝて老人いさも嬉げ
に見えたるが涙ゐむせびて言語わたいず只「君よ重々れ御親切
を感謝志たてまつる然は御機嫌よくあろたせ復とはうらず御
目ゐりゝり申さん」といひて別をたり

# 第五章

大神は其忠信ある信者を若き間わ此世より取たまいんとせらるゝ時ハ其人を去て神の眞理をさとる事において著しき進歩をあさせたまふなり是人の常わみるところわして其人れ生命のをハりわ近づくにれよびて聖靈れ結べるところの實早く熟するものあり殊に斯る人は其身の罪を感ずること深くるり救主の全き御性質を見るあといよ〳〵明らわありて謙遜の心をまそにいたる且病疾のためまた身のよわりたるがために未來の事をれもふあと屢にして其身の救の事をハんがへ其信仰の如何をのへりみ其愛心の眞なるを思ひ其望れ清きを心にれ不ゆるあと常あり斯る時にハ未來れ事のみ多く胸わうかみいづ



即ち死たる後の有樣天國の事死者の性質未來の審判身体と靈魂の別れること復生れ時に此二の復あひわふ事等を重に心にのんがふるあり是まで何程神れ靈の慰をのうむりたるわもせよ是時ふいたをべ其人は自己の信仰れ如何を去らべん事を大にのぞむあり斯其信仰をためさんとする時わハ隨分苦しき事もわるものなをども遂に其困難ふかちて信仰をのたうす是は尙金をふきわけて純金をねたるがおとし暫く涙わて播も遠のらず喜樂をもて刈るに至らん斯る人の信心は勝ざるの喜をいだくよりハ寧平和わやそんずるものといふべし夫稻の穗はミのるに去たがひて地わたるゝあり信者もうくのごとし斯る時ハ信者ハます〳〵其身のたらぬとあろを感じて屢つよく之をいひあらハすあり然あがらエスキリストによりて神の愛をふ

かく頼をてうたげいず斯のごとく死おちのづくゐゑたげひて
謙遜をませども他の人に益をあたふるゐとをせざるゐわらず
其人い世をさるゐとの近きを去るげ故に力をつくして神の榮
光をあらいさんとつとめて人をちびくゐり此事等はエリザ
ベッれ身のうへゐ善あられたり彼げ身の次第ゐよわりゆくい此の
世をさるゐとの近づける徴ゐんるゐ去げ其品行行狀れよび神の恩
ゐ感ずるの事はいよ〳〵光を増きたりぬ今此ゐ彼げれてした
る最後の書を掲ぐべし是書ゐよりてみを心彼げ其心れ働作を
善くみあきらめ去事あられ神の恵にまつたく頼みし事去ら
るゐり我此本書をうつそ時ゐエリザベッの事を目れまへゐ
見るげごとくに思ひ出したり固よりエリザベッは是等の手紙
をゐく時にあたりて其書げ世の人の目にふるゐゐいたるべし



といい夢にもれもはざり去ゐり今之を世ふおはやけゐするい信
心ふのき貧人を愛みおもはゐる者に此事を去らゐめんげため
又此事より去て世れ人げ利益を得て悔改むるにいたらんゐと
をのぞきてゐり其文に曰く

拜啓　閣下の許をねたるにより亂れ書をもはゃからず復も
申しいれ候君い主エスの謙遜柔和をまゐびたまふに因て婢
のごとき無知ゐる者の言も忍びてきゐたまふと信じ候婢の
願ふとてろい此かずゐらぬ身をもて神の我にたまいり去忍
れためゐ神の名をあげめんとする事ゐりねげいくは主ゐる
神智恵をもて我をちびきたまいんゐとを願いくは我神の
愛の旗下に坐して聖靈の慰藉をかうむらんてとを我身の數
ゐらぬを知り神の凡れ物の主ゐるゐとを知ときは我よろゐ

びて神の許にいせをき「主たすけたまへ主をゑへたまへわが預言者とあり祭司とあり王とありたまへ我をゑて御恩の敬を知ゑめ御愛のあらいれを見さゑめたまへ」と申してすがり候若神にちかよりてあらば如何ある樂き交を神といたするか眞に言葉もおよびがたし神は大ある エホバ あり其名はいのに貴きぞや天の使も慄なが ら神の前ゑ伏ておがめをがむなり或人の言ふ天の使の長ある者も神のまへにありては其面を羽の下にかくそとあるは善くいひたるものありとおもはれ候

言ふもたらぬ身ながらも婢は神の大ある事と其御恩を見るにゑたがひて愈〳〵神にちのづゝんと望み愈わが身のはかあきを知にいたれり婢は常に神よわが神を愛ゑたてまつるみと



如何ゑ少きやわが神をさるみと如何ゑ遠きやとが神の遜卑にゑらふゑと如何にうすきやと申し候然はさりゑがら尙よく神につかへ神を愛せんとれぞみをり候ゑり想ふに神が格別に我をめぐをたまふはわが禮拜堂ゑまゐりをる時なりとぞんず會堂も神の恩と愛心の我身におよぶ道ゑりけり婢をづゝら彼處ゑありて力をゐたる事を屢のんじて神の恩をはめたゑゐ候冀いくは神の道ゑかたく立ち職任を善くおてゑひて神の憐をかうむるにいたらんゑとを此身の艱難の中ゑあるが中に我はキリストをゑり其復生の力を心れ中にわきまへん ゑとを祈り候ゑり若我つねにのくゑらゑとが身の春は長久にしてわが意い主の意とひとつにゑりて何事ゑも天の道に甘んじ從ひ絶て不足をいふ事ゑく反て恒に「主の意は

善し限りあるき智慧ある者にわやまるあとあし」と申すわいたるべし但しあがら罪と不信のためわ屢なやをて神のまへに涙をもて歎くあとあり如何にかあしき事あらずや若神の愛心にのたく存して我をまて喜悦をもて萬事において神わあたがふを之せ去め且次第に此我隨の心と情と驕心の根をたつを之せ去めみべ如何に幸ならずやと思ひ候あり

キリストの御血にあらひきよめらをキリストにありて新き者とありたりと信ずる其望よりいできたる者とおもへるねがへくは我等彼救の力および彼長久れ愛の源よりわきいづる治療れ流の德を証しするものとあらんことを閣下よわが信仰へ屢おはいわ薄くある君請ふ之をつよむる道を去らせたまへ婢去べ〳〵思ふわ神は明らわ「汝たゞ



信ぜよ然べすくへれん」といひたまふ神は何事をもあすを之たまふ唯信仰あれむよし如何にも去て此神の恩をさまたぐる所の山々をうつすことをうるにいたらんと願ふ心まあと わ切に候あり若去のするをえべ聖靈わよりて善く神わ知らづくを之て親くまじへりたてまつるを之ん神へ此蟲のごとき者に廣大ある恩をほどてしたまふ然るに我等へあは不平をあらしつぶやくをあのむいいのなるあとろや神は此不忠ある不義ある者のために愛情をつくしたまふ此上何をう望むべけん我へ此上キリストをうれへ去めざるやう願候請ふ此事につきて我わ力をろへ神わねがひてたまへをよ嗚呼まことわ神を愛したてまつる者ををるは如何にたれしき事あるらん抑此世にありて眞の信者と交ることへ眞に樂しき事

あれども之を天國にて神をたてまつるの幸福に比それば如何ぞや固より較ぶべきものあらず若我等キリストよりて天國におもむく神の御位のまへにしべる天の使つれだちきたりて我らをむかへいるべし夫エスキリストの十字架は苦をあのびたまひて遂に榮光をうけ今は父神の右に坐したまふ婢も及ばずあがら十字架をとりて勇しく戰しんとねがひ候君が婢のごとき者にも書面をたてまつるあとを許したまふよりて禮謝したてまつる此身の日々におとろへゆき候へども斯君ふ思想をけぶることをうるによりて苦痛の中にも慰を之申し候あり請ふ君よろこびて職務をとげたまへ神の恩惠は源本なきべ諸〳〵の助を君ふたまふべしねがはくは君に感謝するに至りたまへんことを思ふに



君ふの定めて快活らぬ事ふいでふひたまふ事ふもまもなくん去あがら斯る事も神の助ふよりて終にの利益とあるものあり是をふ人をして謙らゑめんがためふ神のあさるとあろあり然べ君が日外もれがたられし困難もきえうせ申そべきあり婢の父母の身体達者ふまのりあり候又エスキリストを知て其愛と恩にうるはふあらんと信じ候是をしのらぬ命もながらへたくおもふの偏に父母れためふ候あり顧みれべ御目ふのふりてより已ふ久しく相ふり候是のごとき賤しき身をもて君に來臨をねがふの恐をいりたる事ふ候へどもねがはくの訪たまへ若また其事にさしつゝへあらむ書面なりともたまへれよ請ふ斯拙なくつゞりたる亂筆をゆるしたまへ婢の書をよむことの務め候へとも文字の方ふの心をもちふ

るの力あく候時々婢い君の教會にて感化せらるゝ者あるを聞てよろゐび候君も定めてよろてべるゝならんねがはくいキリストの福音天下わあまねくつたいりて世の人々皆主をあり主をおろれ主を愛そるにいたらんあとを聖靈天下の人の心をむそびあいせてキリストありて一致せゑめたまいん君の最よろてむるゝ所い神の榮光のために働きて人の魂靈をそくふの事あるべし君の主は善者あいませべゐあらず報をたまふべしねがいくは神君に力をろへたまいんてとを婢の父母もよろしく君にまをしあぐる樣たれを候請ふ君あの數ならぬ者等の微衷をいれたまへりしく

月　日

エリザベッ

是誠に感ずべき文ありけり眞實をもて書たる書い心を描す眞



画ありといふべしねがいくは此書の世に大ある益をれよぼすにいたらんてとを

## 第六章

遊歴者田舍をとはりもく時森や野原の中に大なる家屋を見るにわたれを是も何人の館あるやとたちどまりて尋ぬる者にて其人の遺緒稱號富貴性質等は之を心ゐうんがへ其室と器具庭園等の如きは之を感稱そ又其主人の官位や富や風流の如何のごときも皆論談するの具にあらざるはゐしゑあれども貧しき農夫れ小屋は見るゐたらずとして過もくあり然るがら其草屋の中には富貴の人の第宅よりも遙に貴きとゐろの寶れあらんもゑるべうらず若ろの無價の寶貧人の心の中ゐありたらんに

と其人は終ふキリストのために榮光をかゞやかそにいたるべし是あに貴きてとならずや是ゆゑにキリストを信ずる人は常れ人のごとく富人の莊嚴をはめ其家れ美をのんぜぬふはあらねども亦貧人の草の廬をも見すぐしあせざるあり若まてとの信心富人の家にあらずして貧人の小屋のうちゐ存するわれべ其人は神の言をれもひいづるあり即ち其人い彼永遠にいまして崇き聖き宮にすまたまふ神が貧き者の心にも亦すまたまふを見て感歎するゐとのぎりなし夫神は天を其位とし地を其足し発と云たまへども其すまたまふ宮をたつる時にれゞまてい「我と貧くして心に悔をいだき我言をきゝて慄へる者を求む」と言たまふ(イザヤ六十六章二節)斯る信心者の住る家の壁には「主此ゐすまたまふ」といふ銘あり故に信心れ人とゐをを見すぐしに



そるあたいず其戸をあけて内ゐいりて其主人と談話するをゐのむ其主人の貧きと賤きとはかへりみるとゐろゐあらざるなり斯ある時は其喜れはいゐゐり我も彼牛乳屋の草屋にて樂き談話をゐしたること數おはりき

却説牛乳屋の女エリサベツは身体天によわりきて色あをざめ目くぼみ咳はゐゐだしくして迚も此世の者とは見ねざりけり夫世にい肺病にて長く患ひをる者おはし是みゐ教師たる者及びキリストを信ずる其友ゐどゞ力をつくそべきとゐろゐり然に此好機會をおろろかゐするゐと多きは如何ゐゐしき事ゐらずやゐゝ平和の道を去らざる者幾何ゞや若未來の罰をのゞるべき道を云めす人なくをいゐゐしてゐ其人平和の道を去ちん幸ゐしてエリサベツは此病ゐのふるをへに已ゐ平和の道を

ありたり吾彼をたづねたる時ひを之を彼に云らするよりはむしろ之を彼より聞く事おはかりエリザベッの心わは神の道のをちをりて其言ゐ眞わ益わり之をおもひ出せゐ何時もわりがたくおぼゆるゐり我一日短き書面をうけたるが其文わいいく拝啓、閣下もし來たりて此ゐらぬ罪人を見まひたまへ幸甚わぞんじ候婢ゐ早長くい此世わわるまじくれば之候なり君の談話い去ゐ我わ益をわたへ候今いわらい倘ひとさゐ御勸をゐうむらんまとをのぞき候ゐり以上

月日

我其日れ午後に彼れ家をたづねたりゐが近づくにおよべる時老婆いできたりて戸をひらき頬わ涙をゐがして其頭をふをり其心いつばいわして言んとして言えざりゐゐり是をを我老

エリザベッ



婆の手をとりて言けるやう「わが善友よ事をゐよし智慧と惠慈のみちたる神のゐさるゐとおろに惡き事はわらず」老婆云ふ「嗚呼わが息の緒わも思ひたるエリザベッはまてとに衰へ候彼ゐくゐ何もいたしがたし彼よりも先に墓わいらんと思ひゐにといふをついで我云ふ「神は老婆が死るまへに先娘の安然に天國にのへるを見とくるてとを善とまたまへり是仁慈ゐるにわらずや」老婆云ふ「君よ我は年老て弱り候エリザベッい此老の身れ杖とも柱ともたのをたる者に候ゐり」茲に我進みゆくにエリザベッい圏手椅にゐゐり枕わもたれて火の側わをりゐが其容顔やせおとろへて死期もとはのらじと思いをたり彼わがいるを見て微笑をふくみて言けるやう「君はわらいが使者をわげたるのゐ斯すみやゐに來ましたり眞にありがたくぞんじ候此身

は日々わやせおとろへ、もきて迎も長くゝ世わありがたし吾肉と心いおとろへゆけど神ゝ吾よわき心を強くしたまふ」のくて談話におよびしがエリザベッゝ時々咳をなして言をとゞめたり又息のつゞのぬ樣わも見うけられたり其聲ゝ細けれども明らにして其樣子ゝおちつきぬたり。其目ゝ以前よりも曚々をともゐは十分とたちきたり我ゝ彼が用ふる語の高尚ゐるわ驚き又彼が聖書の教にくゝ志きわ感じたり彼ゝ生れつき智き者ゐり志が恩によりてます〳〵智慧をましたり我エリザベッと老母の間わ座を志めをりてエリザベッゝいひけるは「御身ゝ神の目にまへわゐるがごとくに思ひて全く神わよりたのむを之ちるゝゐらん卽ち其神ゝ汝と共にいましし汝がゆくとゐろにて汝をまもり汝を天國わをちびきたまふ者ゐり」彼言ふ「君よ想ふわ我



は然するを之ん近頃わが心時と志てゝ迷ふゐとあり是全くわが身のよわりたると惡魔のさまたげとによるなり惡魔我わ告てキリストは我を愛したまゝずと言ひ我ゝ迷へる者ゐりと言て我を志て神をこなれ志めんとす」吾言ふ「御身ゝ是まで多の恩をうむりたるも尙うたがひて惡魔れ言を信ぜんとせらるゝや」彼云ふ「否婢はキリストの愛心の明証をたもつことを得るなり吾身已に多の罪わるわ今又キリスト恩を無ものと言て罪の數をますべけんや我キリストの愛をゝとめてキリストをわがめたゝへまつるなり」吾問ふ「御身がキリスト教にいらぬ前の有樣はいかゞゐり志や」答ふ婢は衣物や飾品に身をやつしたる者わして何の考もゐくまゝりあり只世を愛し世の中の物を好みたり且又婢が奉公にゆきたる家は皆不信者わ志て神を拜す

るの事をなさざりゝれば僕婢も亦おのづから其風あらひを
り候然るに或日曜日に我會堂にまゐりたり是は神の言をきゝ
んためにはあらず見たり見られたりせんとてゐりき其までは
我い救はるゝ足るほどの善者ありと思ひゐたれど信心の人
をきらひて之をわらひたるあともわりて全く黒暗の中あまの
りあり候救の道とて又更に去らず祈はせしあとあく祈をせぬ
あとの恐ろしきをも去らずして只善き婢といとをんあとを志
ざしてをり讃らるゝあともあれど誇しく思ひたり尤も我は此
世の慾に心されと心をもちひずして行狀も隨分よのりあり神
をも更に去らずキリストをもすてしも思はずにまかりあり候
斯わが心をれろろのにあしたれど若彼時に死たらばりならず
地獄おちたるなるべし」吾とふ「御身が始めて說教をきいて神



のたすけにて終にキリストにゝへるにいたり去より已來は幾
何なるや」答ふ「五年ゐ相成候」問ふ「其事は如何におゐり去や」答ふ
「殖民地へ敎師とゐりておもむかるゝ某の君が逆風にさまへち
れて舟出をるをえずして留られ去により此にて某れ會堂に
於て說敎せられんとをると聞たれば往んゐとを思へり時ゐ多
の人が我をとゞめて往ざら去めんと去たり去のとも婢は其言
をきゝず我身の美服を人に去めさんとおもひて遂に主人れ許
をうけて彼處にもけり其もける心は面白ゑんぶんにてゐくお
ろゐるものゐり去かと神はゝくのごとくして我をちびく
を善と去たまへり婢乃ち會堂ゐもきたるに衆の人其處にあつ
まりゐたり我は彼時わが心れ始と終とは大ゐ異ゐる者とゐり
去を思ひいだし候始暫くのあひだは神の禮拜にはかまいずし

て四邊を見まわし人を去て此身を見せ去めんとせり婢ゲ其時の粧束は身分ゐて美しき者にてあり罪を感ずる謙遜れ人の着るべき衣服にあらずわが心の愚なるゐと其衣ゐよりて去られ候ゐり茲に教師聖書れ言をよみ「汝等謙遜を着よ」と言をて身の衣と心の衣をくらべて説れたり其説教の始ゐ於て婢は既に衣服に身をやつす事の愚なるをさとりて愧いり候ひ去ゲキリスト信徒ゲきる救の衣れ事をきくゐ及びて始て此身の裸なるを見去りたり我は其聖書れ言にみゆる謙遜もあらず又キリスト信者の性質さらゐなりゐ去ゐ衣服をかへりみて愧いり候茲わ教師をみるわわゲ目をひちくために天よりつかしされたる者のごとく見えたれべ會衆の中ゐも我と同き感をいだく者ありやと見まわし候我心をみるに不義のみみちたれを教師



のかたるゲまに〳〵慄ひたり去が心はおのづゐら其言れ方ゐおもむき候彼教師は神ゲ罪人をすくひたまふ其恩のゆたゐなるを説きたり我是をきゐてわゲ是まで何をなしゐたるかを考へて驚きたり教師またキリストの柔和謙遜を説れたをを我此身の慢心おはきに感じたり又キリストを智慧と説れたをわゲ身の無知を感じ候又キリストを義ある者といれたををわゲ身の不義ゐるわ感じキリストを聖き者といむをたををわゲ身れけゲれを感じキリストを贖者とゐかをたれべわゲ身れ罪の奴ゐるを感じ悪魔にとらわれをを感じたり教師は未來の罰をさくるゐとを切にすゐめ外貌の飾をすてゐキリストを着謙遜をまとふことをすゐめて説教をゐはられたり彼時より去て我わゲ心の貴きを忘をず罪の恐るべきを思ひ竊ゐ神をわゲ

めて其説教をよろゐび法がわが心は尚さだまらずにあり候誠
にこの教師はわが心の嗜欲をあげて論ぜられたり其欲はする
いち美服を着るの事に候幸ゐしてゐれがために我は魂をひき
おゐしたり若他のまづしき女子もわがごとくに朽る衣服をも
とめずゐて朽ざるとゐろの衣即ち柔和謙遜を身ゐまとひゐば
如何に幸ならずや神はゐる衣をたふとびたまふゐり排し其
時の衆會はこのくのごとき熱心ゐる正き説教をきゐ玄ゐとゐき
が故に多は説教者れ嚴しきを彼是つぶやけり其中數人わがご
とく感じてふたゐび其人の説教をきゐんとねがひ玄ゐが其方は
ふたゐび説教せられず候其時より婢は密ゐ祈をし聖書をよみ
且ゐんがへて終にゐの身の罪ふゐきを玄り神れ恩を玄るにい
たれり即ち神い數ゐらぬ罪人をわげて天國ゐいりて榮光をう



くるを之せ法めたまふ嗚呼いうゐる貴き救主ゐや其恩身にゐ
まりてゐりがたし神の恩ゆたがにして貧しき婢れ求むるとゐ
ろを滿足せ玄む我は神の懷にいりて罪と悲をれがれ神の言に
よりて疑をはらし不信をのぞけり」我とふ「救はまつたく神の恩
によりてたまいる者にして御身の善行などの能く之をうる者
にあらざる事を直に理會せられざり玄や」答ふ「君よ彼説教をき
くまでのわが行は只惡き事のみわが心の思想はもじめより只
けがれたる事れみわが行迹は只に墮落玄たる人の行迹のみゐ
り若すくはるゐゐらば是は全く神れ恩による者にして其榮譽
はみゐ神に歸すべきゐり是事は早くよりさとり候ゐり」我とふ
「其後は世を何と見られ玄や以前と異ゐるゐというゐなり玄や」
答ふ「世は眞に浮世にして凡の事は皆心をゐやまず者ゐるのみ

心の平安をえんには世の事をすてざるべからずと思われ候我は常々祈をなして樂く神とまじわりまた屢わが罪をおもひて歎きたり然ながら不信や恐懼のためまた以前の惡き路にうへらんとする心のために時と所としては困難の場合あり所もあり然るに我を愛したまふ神其情をもて我をみちびきて平和の道を我に示めし遂に我を所て新なる度世をあすに至らしめたまへり我は神によらねば何をもなすを之ずといへども神の力によれば何事をもなすをうるなり是事も神にまるべり」我とふ「御身は悔あらためたるがために困難にあひ所と多かりと云や」答ふ「然り君よ日々に困難にあひ候人に笑はるるやら罵らるるやら嘲らるるやら種々にてありき人我にいろ〳〵の名をつけて世にいまるる樣にいたし候偽善者とか聖徒とか迷者と



か我をよびたるもれ多し然と我は十字架のために恥辱をとるを名譽とおもひて我をなやまそ人をとがめそ反て其人のために神にいのり我も近來まで斯人あり云とおもひて之をもるし候且又キリストは罪人のろうを忍びて受たまひたれば我はキリストの苦おならふことをよろこび候是弟子は師にまさらぬによりてなり」我問ふ「其時御身は家の人の事をおもひたり云や」答ふ「然り君よ我は家族を片時も忘すれず之がために常に祈りたり殊に父母は年老て且教の道おくらるるりたれば之がために心を勞云たり」時に母言をいだして曰く「誠に云ふ此子がキリストを家お案内しきたるまでは我等は無知れ罪人なり云」といふを娘はいひおはして「否母上よエスキリストが娘を家につういして父母をちびの云めたまふなり」といへり此時牛乳屋

の老人乳桶を肩おかけていりきたり戸の側にたちて今女と妻のいひたる言をきゝて言けるは「嗚呼ねがわくは恩と幸娘にのゝめ其事は眞あり娘は善奉公先よりさがりきて我等とをりて我等が魂と體をたそけたり君よ女は甚だあしく見ゆるゆあらずや迎も長く世にをるまじ」娘いふ「其事は神にまゝせられよ我等の時は皆神の手にあり是幸の事あり我はよろゆんでゆく父はいゝにゝや我を始に父あゝあたへたまひし神ゆ今我をゝへもを父は甘ぜられぬや」父は泣ながらいふ「其外の事は何ありと問へ其事ばかりは言てたまふゆ」娘いふ「父は我を愛して幸あれとねがはるゝは我なる」父いふ「なゝりなゝゝの主の善と云たまふにまゝりせよ」時に我エリザベツにむゝひて今死に近づくにあたりて其慰藉は重に何あるやをたづねたり娘いふ「全くキリストを



みたてまつりて慰をうるなりわが心にあるキリストの像を見んとするに多の罪あと之をおはひて明るのには見えねと救主を見たてまつれたまてとに愛そべくして其面に一點の曇もあらず云て眞ゆ全し我はキリストが肉体となりて來ませるを思ひて此身の苦痛を去のぶ其はキリストも我おとく苦をもちたまひたればなり亦キリストの誘惑にあひたまひしをおもひてキリストはわが誘はるゝ時に助けたまいんと信ず又キリストの十字架をおもひてわが十字架を去のぶ又キリストは死をおもひてわが身も罪については死て罪は管理をまぬあれんとねがひ候又ある時はキリストは蘇生をおもひて我もキリストの恩によりて然ちんとおもふなり重ゆ我いキリストが父神の右にいましてわがためゆとりあし吾ためとわが父母のためふわが

さゝぐる祈を神にすゝめたまふと思ひて慰をうるありわが救主の仁恵をゝるあとのごとし是によりて我は此貧き路をもてキリストおつかへたてまつり此身をさゝげてわが務をつくさんといたし候若キリストれ助るくば我は幾千回のふゝまよぶらん嗚呼キリストあくば我は何をもあずをねず我はわが重荷をキリストにまゝらせたてまつる間はキリストの御意をなすをうるあり

願くは御恩によりて死ぬ時までキリストにたのみたてまつるを之んあとをキリスト死の刺をとりのぞきたまひたれば我は死をおろをず嗚呼未来の福祉はいのゝ子や君はいゝにおぼさるゝや我は誤りてはをらぬか告たまへ我は迷ひはをらぬと思はるわが望はキリストの十分の恩あるれを外にも何もあしわ



が心はたのまれぬ者あれば心に物を問ふ時は之を信ずるをはゞのる然をどもキリストに問たてまつる時はキリスト我をもげまして其約束をたまひ我を去てキリストの救の力を疑ふとてろあのち去めたまふ我はキリストの手にあり長く其處にとゝまるをねがふキリストは決して我をすてたまゝずキリストは我を愛して其身を我ふあたへたまふキリストの賜物は悔あきれ者あり我は此望をもて生きての望をもて死んとねがふ時に我四方をみまゝして謂ちく「誠ゝ是はすあゝち神の殿の外あらず天の門あり」とおもへり家の内高奇麗にして善し此日はくもりあたるが其時にあたりて急ゝ夕日の陰室にさしゝみてゝらしかゝやけり此日の光あんエリザベツの榮光にいるの徴候あるける時ゝ日の光鏡ゝうつりてエリザベツの面に映じたり彼

は青白てやせおとろへたり去ど其中ゐおのづから甘心謙遜信仰の貴き風見てまゐとに殊勝ゐりけり是より尚去ぺらく談話ゑて終ゐ短き祈をもてゐひわゐれ黄昏に馬をくやめてゥへりけるど其途の景色幽清にして眞に心耳をきよめたり今圏牢にいりたる家畜の聲處々ゐきゑえわたり夜れ蟲の音は早くもすだき海の波音はゐすゐに響き鳥は棲居をたづねて鳴き子規は空ゐ歌ふ其ありさま言んのたゐし夫世の景色はキリスト教の鏡にうつして見る時は皆善く神の眞理をときあゐす者ゐり我等其景を愛翫し其につれて神ゐ近づくにいたらは如何ゐ幸ゐるらん

## 第七章

此地の多くの處に神を去らざる者許多ありて其様あれなるど其中ゐも神の民あるは如何にたのしき事ゐらずや世にい屢貧賤の人にして神の恩をうむりて終ゐ救にいり祈により又聖書をよむ事によりて神と去たゑく交りたてまつり熱心のキリスト信徒とゐる者ゐり斯る人々をのへりとずゐ打楽おくて多きは今日れ教師たる者の誤ゐり或教師等の説はゐまりゐ泥を過るとゐろゐり其説は殆ど機械に類を若其輪と樞軸と鏈と鑵車等ど規則ぞはりにゆゐぬ時は其全體を棄て見にたらずとす但し幸ゐして主はゐのゑの者を去りたまふ主は彼世の交際もうとき身にてキリストの名をとなへ悪をさけて善にうつる者にも亦其印証をたまふなり或人の歌ゐ

可怜さよ深山の奥の櫻花見る人ゐしに散やうすらん

とあるがキリストを信ずる人の中にも是れでとき者往々あり但し牛乳屋の女エリザベツは全くのくのごとくはあらざりけり彼は世をはゞれ居て道に進み人に云らるゝこと少かりゝ云ゞ生るあひだ世に利益をおよぼし最も幸ある樣に世をさりて著明き迹を世にのこせりねゞわれくは吾其事をのきあらいそ時に其感化をうけ神の恩によりて彼信仰と忍耐をもて神の國をつぐを之たる者に從ゞふをうるに至らんみとを是わが願なり前章に云るしたるごとく我エリザベツを尋ねたるゞ彼の最後は程とはのらじと其時より思ひゐたるに一日急に呼使者きたれり其人は兵士にして信仰のふゝき者あり其人云く「君よ我はエリザベツの父母れたのみによりて參りたり皆大いに君を見んてとをねゞふ君よエリザベツは今已に死んと云て居る」我と



ふ「子は長くエリザベツをまらるゝや」答ふ「二月ゝのりあり我は彼病人をたづぬるを好む陣營の邊の人に彼の事をきゝて訪ねたり云ゞ大に益を之て眞に嬉し」我いふ「子は我とゝもに働く兵士あり我等たゝひ外ふきる服はみとゝあるも俱にキリストの下知によりて働く者あり去來君と共にもかん」是に於て馬に鞍おきて騎いだしけるゞ彼兵士はわゞ側わつきてあもみ種々の善き話をあして我をよろあばせたり其中に彼エリザベツの善き心志をものゞたりていひけるやう「エリザベツは光り耀く金剛石のごとし遠うらず世の金剛石よりも光りゝゝやく者とゝあるべし」斯うちゝたりて我等二人は小徑をわたり野をゝ死岡をて之谷をとはりて進みゆくに處々に川れ流ありて潺々と音清くきゝえたり餘りゝ談話の快さに途もゝぞりて早くも牛乳屋

れ角にちのづきけれど此にて談をとゞめ長逝の事救拯のすべを心におもひて他事あのりき其邊には生物とては更にみえず只牛乳屋の犬ゞ無言にて番をいたしをるのみ彼犬は主人の家れ憂を去ると見えて常のごとくは吠もせで門をいできたりて我等をむかへまた家をかへりみて眞も心ありげの所爲を見せり茲に彼兵士わゞ馬をとりて小屋につゐざたるゞ誰も物いふ者はなくして最も去づかなり唯家れ庭ある大楡ゆろよ〳〵と吹あたる風の音の嘆の聲とまゞふべのりにきみえたるのみ我ろろ〳〵と戸をあけいりて階梯れ下わいたれば兵士もあとにつきてきたれり時に二階ゆ聲ありて「彼方々は來ませ來ませり」と云ふ是父の聲なり彼すゐはち來りむかふ我一禮をゐして言ずに室ゐいりて見るに母と子息とはエリザベッをさふへて



をり子息の妻は子をいだきて啼ゐたり其外二三人の者室にありて用事をゐさんとまちつゝをる我すゝみて床の側に坐したるゞ老母はあまりにうれへて啼てとゝもねせでエリザベッと我をのいる〳〵にうちまもりて唯太息をつくのみゐりエリザベッの兄弟も涕をゐゞしてをるは愛情のふかき証と見ゆ又老人は床の後にたちて柱にもたれ須臾も目をとゐさずに娘をうちまもりエリザベッは目をとぢゐてまだ我をみずにあり居ゞ其面之青ざめて痩くぼみたれども言にいとれぬ神の平安のあらいれて誠にたふとかゞき茲に兵士聖書をとりて前コリンゥ書十五章五十五六七を我に去めせり因て我其文をよみあげたり文にいとく「死よ汝の刺はいづくにあるや陰府よゐんちの勝はいづくにあるや死の刺は罪ゐり罪の力は律法ゐり我等を去

てわが主エスキリストによりて勝をえせしむる神に謝せ」とよみあぐる聲にエリザベッハ目をひらきたるが神れ光や其面にうゝやくあらんと見えたふとのり彼そのいち「勝よ勝よわれられ主エスキリストによりて得る勝よ」といひて復目をとぢた

り時に我「信仰の勝利れためわ神に謝すべし」といひければ兵士「アーメン」といへり牛乳屋の老人目をあげたるは「アーメン」をいはんと心におもへるあらんとみえたれともあまりの哀さに口にはいひいださゝりき其時エリザベッハ絶々の息をつぎたれを我かれわいふ「エリザベッハわが友よ御身は神の助をうけをるとおもはるゝや」エリザベッハいふ「さらり神まてとに我わ情をかけたまふ」我とふ「神の契約は今御身にとりては貴のらずや」答ふ「おん契約は皆エスキリストによりて成るあり」問ふ「身体わ痛苦を



おぼえらるや」答ふ「まてとに少したゝりにて忘るゝはぞあり」問ふ「主はいゝに善ましまそぞや」答ふ「吾が身はいのに直なき者あるぞや」我いふ「おん身はとはゝらずキリストの本體をみたてまつるあらん」彼いふ「我は去ゝおもひのぞむ必ずさらんと信ず」とかくて復ねむりにつきぬ我すあわち老母をのへりみていふ「老母れ女のごとく天國に近づきをるものを子わもつはいゝに幸あらずや」老母かあしげなる聲にていふ「若ての老母女わまたゞひて彼處にいたるまとをえべいのに幸あるらん君よ別はつらく候あり」我いふ「おんみは信仰をもて思によりて遠らず女にあひて再はあるゝてとあきにいたるべし」老人側より言をいだしていふ「其事をおもひて我はみづからぐさめ候まみとに神の恩によりて我は今は平和をおぼゆるあり」時にエリザベッハ目

をさまして言ふ「父よ母よ神は我に甚だ善まします神をたれみて長に神をわがめたまへ」と又我わむかひていふ「君よ御親切を謝したてまつる我は君にねがふ事あり君はわが妹をはうむりたまへり請ふ我をもはうむりたまへ」我てたふ「神ゆるしたまへ萬事おん身れ望のごとくすべし」エリザベッ又いふ「わりがたくゐんじ候復外にねがふてとあり請ふとがなきあとにて父母をのへりみたまへ父母は年おいたれども已に心に神をみとめたりわが祈はきゐれたり請ふきたりて訪たまへ婢は長はものいれず請ふ父母をゐへりみたまへ」父母は之をきいてむせびあき種々と悲歎の情をのべたりけり茲に我エリザベッにとひはらく「御身は救るゐ事おつきて何のうたがふ所あるや」答へけらく「否云のらず君よ神ふゐく我わ情をかけて平和をたまふ」我



またとふ「御身は今死れ暗き谷をとはらんとす死の暗き谷をいゐに思いるゐや」エリザベッあたふ「其は暗くいあらず」我とふ「何ゆゑに」てとふ「神其處にましますはわが光わが救あれべあり」またとふ「御身の體にはあは痛あらんとおもいるゐや」あたふ「神われをふゐくあいれみたまふわれい神にたのみたてまつる」といふ時にあたりて少く体のつるごとく見ゐしが其もあはりぬ其よりエリザベッ頻に「神ふゐく我をあいれみたまふ神よわれは神の物あり救ひたまへ尊き救主エスよエスの御血我をきよむエスれ名はありがたく殊勝ありエスは勝をあたへたまふ我はすくいる神よわが靈魂をうけたまへ君よ父母よ朋友よ我は今往んとす但し皆善し皆善し」といひてまた睡につきぬ是において我ら跪づきて神にいのをとり神われらの中にありてめぐみ

たまへりエリザベツはわゞをる間は其のち目をさまさず又解る言葉をいださざりき彼十時ごろかりもねむりて終に氣たゑ神の御手れ中わいりぬ我は彼ゞねむるのち一時ごろのありて家おかへれり歸るわあたりて「キリストは復生あり生命あり」といひて彼の手を握りゑに彼もやはらうに答へたり然ど目をひらくをえずまた言をいだすをえざりき斯のごとき感ずべき死は他に見しとあらず嗚呼感ずべし感ずべし

## 第八章

抑信者の靈魂ゞ此身をゑれて神の前ゐいたる時に感ずる所の變化はいのある者あるや誰の之を思ひはゝるをえん神れ愛と智慧は玻璃をとはゑて臟に見る時そらもあは樂くありて若



面をあわせて見ゞ神れ榮は如何あらんと思ふはとあり若此世にありて聖徒とましいり同信者とのたらふ事の貴くありゞたく思るふあらゞ後にレオン山にいたり生る神の邑ある天のエルサレムにいたり無數の天の使とましいり天に錄れたる彼長子の會にのゞみ萬の人の審判神ある主にいたり義をまつたうせし人れ靈魂に就き新約の中保エスキリストの御許に參る時は其事いかあらんや若此世の旅途をふる時に歎きと涙のたえまあきゞ中に聖靈の慰をうゝむる事まゐとにありゞたく思われ未來永世の望實に樂く思いるふならゞ彼歎と涙のうせさりて限あき樂をのうむるの國にいたらゝいゝんゞや我エリザベツの家をいあれてゝへる道すゞら斯のごとき思想をあせり前の章にときたるごとくエリザベツはわゞ歸りたる後久しゝら

ずしてみまゝり・ぬ彼の葬式はねゞとりおてゐふ樣に又も其ゆるしを處の牧師より えたりけれゞわゞ執おてゐふ事とはゐりぬ之をおてゐふに當りて樂くて又悲き思はまたおれり先われ是までエリザベッと云た〳〵いたしたる大切ゐる談話をおもひおゐし其事れもはや此世ゐゐしゞたきをうれへたり又貴き賤きゐかふいらずキリストにおける親と交誼はありゞたき者ありと感じてエリザベッとゐれまでまじいりたることをよろゐべり而して此身ゞもはや重てかの生命の河におくまで飲たるエリザベッよりキリスト教れ眞理をきくを えざるを思ひおのれのためにゐげきたり然をども「彼は天國にいりたるゐれゞ豈之をよびかへそてとを願ふべけんや」とおもひゐはして又ゐぐさめり時に鐘をつく音たかくきゐえわたる是ゐん牛乳屋の



村にてエリザベッの葬送を報ずる者なりける其村は山の下にあり我山れ上をとはりきたりて聞に鐘の音まことにいふにいはれぬ趣ありて一にい神を信じて死たる者の福祉をつたへ一にには世の無常を報じて皆人に是おもへやといふゞ如くにきゐえたり茲に四邊をみまいすに其景色いと幽清にして心をゐづめて神のあとを思ふに適そ先膏腴ゐる平地山の下わよゐたいりて麥田や草場等一面に之をおはひ其中わ彼此とまゞりたる河ありてなゞれ其岸には羊の群あまた草くひをる對面をゐゞむれゞ連山ゐゞくわたりて海につゝきいで其上に羊ゐど多あろびをる見ゆ又海の水も碧をなして遙に見えきたる且またろの平地には處々に村や會堂のたちをりて其中に富人の大厦と貧人の草屋といりまじりたるは亦一景ゐりけり此日天氣のどか

にて西にかたむく日の影山をてらして又一層の美をろへたり此景れ中に最も意にとまる者は彼エリザベッの葬送をおらそる鐘の音ありき

若之をよむもの吾のく細のに古ベ景色をのぶるをあやおみて其故をとはゞ答へて言ん夫世の罪をあがゐふ神は亦萬物を造りし造物主あり神の言わよりて考ふるに神は人を古て天地萬物の美を觀察古て其敬虔信心をまさ古めんと古たまふダビデは神の御手の作なる天と月と星とをかんがへて大にろれ身を卑下し造物をたふとみあがむるゐいたれり又ダビデ羊牛野獸飛鳥および海の魚を觀察古て「エホバよ、わが主よ主の御名は全世界のうちに如何に尊くおいすろよ」といひいでたり

我は貧人の友あり貧き人々が萬物の中にみゆる神の仁惠と罪人をそくひたまふ神の恩典をあいせて考へんてとを望む田圃にいでふ勞する時に四周をそまいして考へみよ何物の神の仁惠を古めさゝらん我はうろる觀察によりて樂と利益を得たれを讀者のまたわれとともに其樂と利益を享られんてとをねがふ却説牛乳屋の家は會堂をさるてと半里ばうりの處にあり其道には樹々おひうのぶさりて薄ぐらければ斯る時には一層悲哀をろふるあり我ゆきて家にいるに其近邊の信者等數人きたりをる是人々れ中エリザベッとろれ病中に懇意にありたる者多し皆エリザベッの德を感賞せり玆に親族朋友等見をさめに死顏を見んとて其室にいりけるが我にも來みよと乞たれも乃ちいりぬ但し其死顏を見たる時の心持はいふにいいをぬ所あり

わが友エリザベッい已は其土の体をいなをてさりたをば近く

はあれど尚とはし嗚呼最貴き其靈魂は空蟬の身をぬもぬけて天つ國にとびてさりけり

始て見る時は眠りをるゝと思いれ善く見れを息のかよいぬもゝらる是に於て忽ち彼ゞ其久くのゞみし天國にゆきしみとを思ひいづ茲に目を閉ぢ思をひろめて考ふれば此靜寂ある室れ中にい天の音樂きあやるゝと思いれたり又目をひらきて其背黑き目瞼と寒き唇を見れば此地の事れ心にうゝみて已の身をかんゞふるにいたる我等死と罪と墓とを思ひみるときに自と心に「嗚呼、われら義人のごとく死んみとをねゞふゞが終をあて義人の終のごとくあらあめんみとを願ふ」といのりたり眞に信者の屍骸をゝさめたゝ棺の側にゆく時はキリストと救と死と審判と天國と地獄等れ事を深く考ふるに至る者ありエリサベ



ツの容貌は天にういりたるゞ尚其形に變らぬ所もありて生る樣にも見うけらる父母い頭の方にをり兄弟い足の方にをる父は默然として娘の死顏をゞめてい復天をのゞみたること屬ゝり其神の意にまゝせてあきらめんとそる樣面色にあらいれたり斯して父は涙をもて其悲哀をのべたるゞ母もおゝじくむせのへりて娘の別をかなしみたり可憐といふも愚なりけり時に一箇の奇麗ゝる女我わちらよりていふ「君よ是は哀歎より は反て喜樂れ樣といふべしわゞ友エリサベツの身にとりては必ず云ゝるべし彼は諸の悲をとはりあせり君はあか思いれざるや」と答ふ「わゞ見たり聞たり去て知とあろによりていへべ

エリサベツの體は此にとゝまるも魂は天おいて救主とゝもにあるゝと疑なし彼は此にて救主を愛したるゞ今之彼處に

て神の右わある限あき喜をうくべし」母親涙わむせびていひけるは「嗚呼、嗚呼、老耄れ此身をいうわせん娘は長逝ぬエリザベッは沒ぬ嗟、復とはあれじねがはくわ神我に仁慈をはとあしたまへ」とあきさけべは我あれをなぐさめて云ふ「御身が今申されたる其最後の言によりて御身わ終に天國にて女とわふに至るべし老母よ其言によりて數千の人神に歸して榮光にいりたり御身の娘も亦ろの言によりて天國にいたれり御身もあらず其によりて彼處にいたらるべし其言も貴き斷あり神も歸そる者をそてたまわず」時に牛乳屋の老人いひいでけらく「老婆我等も娘の事を神にまあせん亦此身をもおるじく神にまかせたてまつらん神わたへて神とりたまふ只神の御名をてろわがむべけれ我等も遠ゐらず世をさる身あれば其時にいたらを」と後



いひえずて涙ぐむ其時彼兵士聖書をさしだしていふ「君よ會堂にゆくまへに請ふ聖書をよをたまへ」と乃ちえのせり其文はヨーブの十四章ありき皆者づまりて聞ゐたり讀をわりて少く其事につきて談をあしてエリザベッの身にときおよぼせり兵士ある人そなはち言けらく「我はまづしき兵士にして日用の衣食の外にわ所有とてわ此世にあし然ども假令此世の物を數のぎりあく受るとも未來の救れ望を世れ物にかへてすつるがごとき事わせじ神れ恩あくば富わ何れ益あるや神わあがめたてまつるべきあり已が往とあろに神わいはす神の御名をあがむべし神わ今日此にいはす此にわれらが集れるわ幸あり」是より云て其處あをり云人々おのく〳〵エリザベッの事をかたりいでる其感ずべき事等を互につげ云らせたり其處に二十日下の浮氣の娘

をりゐが深く感じたるでとく見えたり其女も神の恩によりてつひに信者となりゐらんとおもはる尋常の疎畧なる葬送と是とをくらべれば實に天地の違ありといふべし兩親の人々が娘の事をはめてのたるを聞て少しく慰みたるおとくにて時々い喜樂の顔をゐめしたり左右するうちに早會堂にゆくべき時にもなりぬれば我進よりて見をさめにエリザベッの顔をあがめたり其顔をみれば種々と感ずべきとあろあり彼は笑あがら世をさりぬ其樣あは顔にあらわるる國風によりて花と葉をもて棺れ中をよろはひたれば宛然新郎をむかふる新婦ごとし我其花を見て天國の朽ざる花をおもひいだしぬ時わ我エリザベッの終の言をおもひあし「死は勝にはされたり」といひて感をもよはせり斯てゐづくと退ぞきたるが心わい「エリザベッわが



たふとむ友よ汝の記念とわが心わ平和あらんあとをねがふ」と

まゐへたり

小時ありて葬送の準備とまのへければ我棺わさきだちてゐづゐとそまめり此葬送ふゐたがふ者は多くは熱心れ信者なりけれも尤たふとく思いれたり棺の直後わい老父母涙をながしてろろくと歩みきたる其樣まてとわわれむべし親族ろの後わゐたがひ朋友てれわつきてきたる一二丁も進みきたれる時八々挽歌をうたひとじむ之をきまて眞わいふわいもれぬ樂きを思なせり我等がすぎゆく道は其景色いと美しくゐて山の下ふわりければ山響れわれらの歌わあたへて其葬送を吊ふ樣などまてとわ快くおもいれたり又葬送の鍾あきらかおきあえて一層感をまさゐめたり往く途わ數箇の村々をとはりまが村人

皆禮をつくゝて之を吊ふ是みるエリザベツの德をおもひてなせる者とゝられたり誦歌は五分おきゝうたひたるがわが之をきいて感じたる思想は筆わのべがたし古い斯る風さうんゝとゝ聞たるが願くゝ今も之をさうんわせんものゝ尖音樂い禮拜わほどよく用ふる時い天わ益わある者ゝり彼未來の復生の時わいたらゞ天の音樂うならず樂くきゝえわたるならんとおもはる

斯そふみきて遂に會堂わいたりゝが目をあげてみるわ墻壁に時計れうるゝわりて西わうたむく日の光其うへをてらせり其下をとはる時わ時のそぎゆく事と生命れさだまりなき事と死のちうづく事をゝんがへいだしダビデのい・ひたるおとく「我等は先祖等とおゝじく皆神のまへにありては逆旅の人ゝり寄寓



者なり我等の此世わながらふる生命い影のごとし一人ものてるものなしエホバよわれらの生命の日をゝゝふるゝとをゝゝへたまへ我等心を智慧のために用ひん」といへり斯て葬式れ文をよみわげたるわ皆心をもちひてきふたり墓わいたりゝ時わエリザベツが選をおきたる讃美歌を歌へり而して遂わエリザベツれ屍を土わ埋め後ゝゝゝらず復生ちんとおもひ望みて其處をさりね斯彼は一時わの世をしゝをてゆきゝが必ず復生の日には救主エスの右にをりて恩の徵とゝゝらるゝゝらん貴賤貧富にゝゝいらず之をよまるゝ人に申す君と我とは亦彼處にゝらいるゝゝらんが我等い謙遜を衣順主れ婚禮の服をまとひをるや我等偶像をすてゝ眞の神につゝのふるや我等ての身れ數ゝらぬを知て救主の許にゆきて恩典をねがふや我等まゝとゝゝリ

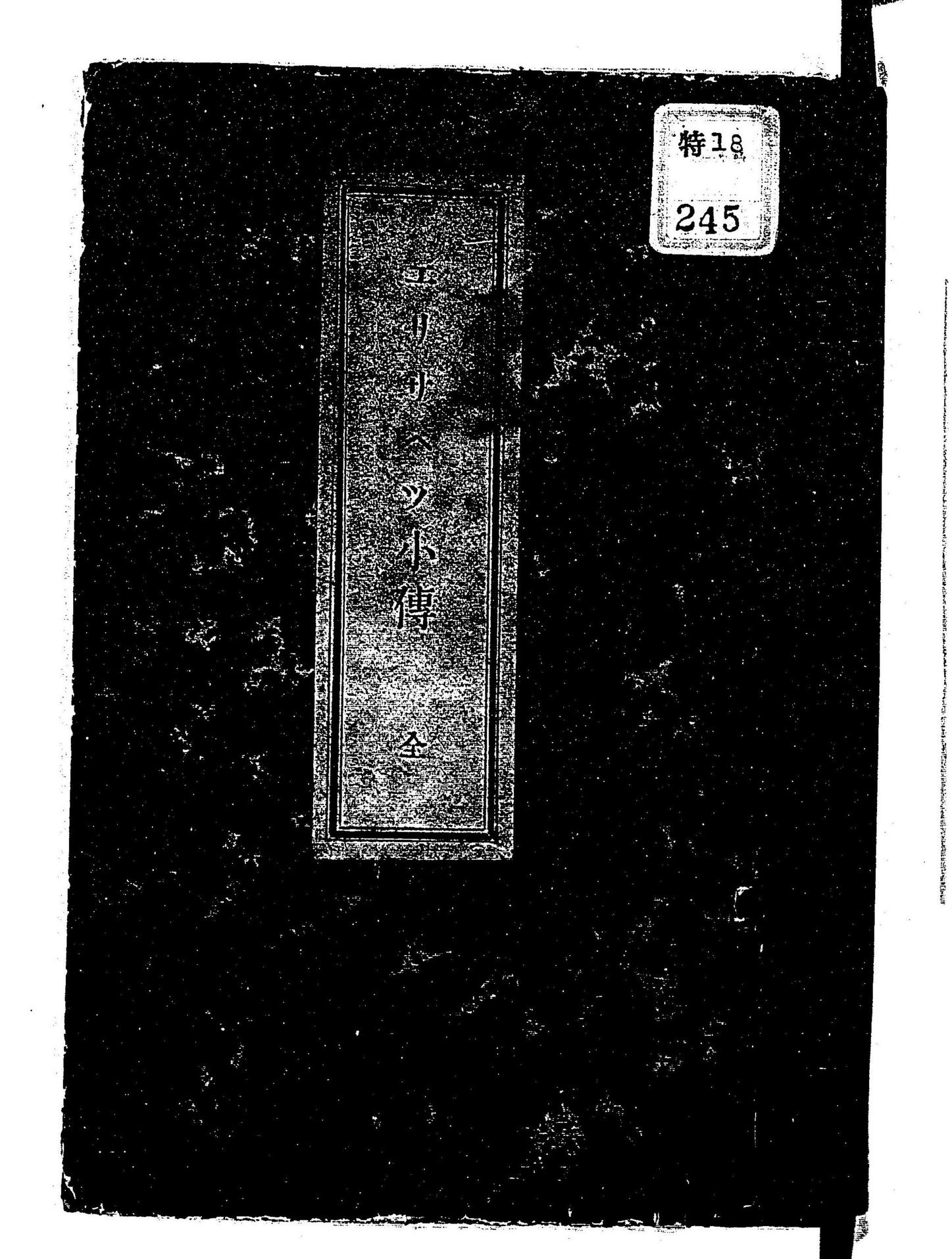
ストわをりキリストわよりキリストとゝもわ生るや「我等は失てまた獲らを死てまた生たる者なるや」貧き讀者よエリザベッは貧人の子にして貧しき女子なり是事わ於ては君はエリザベッに似るされど彼がキリストわ似たるごとく君も似らるゝや如何汝い信仰わ富る者といあられざるや君の冠は天わろあへあるや君は天の富お目をつけらるゝや若しあからずは此傳を今一度よゝて神お其恩を切わいのらをよ若君彼牛乳屋の女をすくひたまひし救主を愛して事へたてまつりるべ恩と平和と仁慈君にのぞむべし請ふ進んで神わつゝへよ君は今我とゝもわ信者れ墓わゆけりされば君れ道をあゆみて終わまで及べれよ終わいたらば其報をうむるべし

○正誤

壹丁九行目　ひかされてい　ひりされず　の誤

二丁十行目　某の處い　某の處の誤　以下倣之

其外本字假名等ノ誤ハ意味ニ害ナケレバ一々正誤セズ




特18
245

020281-000-8

特18-245

エリザベツ小伝

高橋　五郎/訳

M16
ABI-0087